

清代中後期における女性知識人の生き方

——陳爾士家族を中心に

瞿 艷 丹

| | |
|--------------------|-----|
| はじめに | 399 |
| I 陳爾士の生涯 | 401 |
| II 家書から見た陳爾士の家政と社交 | 405 |
| III 錢儀吉子女の名前と婚姻関係 | 417 |
| IV 陳爾士著作の刊刻と流通 | 422 |
| おわりに | 427 |

はじめに

過去数十年の間に、明清時代における豊富な閩秀詩文集（女性詩文集）は次第に学者たちに注目されるようになった。スーザン・マン（Susan Mann、曼素恩）、ドロシー・コウ（Dorothy Ko、高彦頤）などの歴史学者は明清時代の女性詩文集を主要な文献として研究を展開し、近代以降における順従かつ沈黙する伝統的な中国女性像を修正した⁽¹⁾。2005年から、マギル大学東アジア研究科とハーバード燕京図書館は、ハーバード燕京図書館、北京大学図書館、中山大学図書館、中国国家図書館、華東師範大学図書館、香港中文大学図書館、そして香港浸会大学図書館に所蔵されている明清時代の女性詩文集をデジタル化し、「明清婦女著作」（Ming Qing Women's Writings）というデジタルライブラリーを公開した。これらの資料は、明清時代の女性史研究をさらに推進した⁽²⁾。

しかし、従来の研究は、明清交替期や清末民国期といった大きな転換期に生きていた女性に注目することが多い一方で、それ以外の時期に対する関心が薄いと言わざるを得ない。スーザン・マンは、清代中期から1890年代にかけての中国女性に関する研究の欠如に注目し、従来の研究者たちは19世紀末頃の転換期に教育を受けた女性の重要性和、彼女らが19世紀の国家・社会において果たした役割を見逃してきたと指摘している⁽³⁾。方

秀潔 (Grace S. Fong) もまた、この時期の女性による創作は明代から清代中期にかけての女性による創作の伝統を引き継いでいたことを確認した上で、20世紀に入ろうとする時期に国際的・国家民族的な文脈の中で現れていた女性の創作の多様性を展望した⁽⁴⁾。

近年、清代女性詩文集が多く影印出版され、また清代の男性学者の書簡や日記などの新資料が次々と影印・整理出版されたため、清代の士人家族に生まれた女性知識人の生活細部をより深く考察できる可能性が高まっている⁽⁵⁾。しかし、前代より史料が多く残されている清代であっても、種類・分量ともに、女性知識人が残した史料は男性知識人が残したものと比べると圧倒的に少ない⁽⁶⁾。女性知識人が残した日記や手稿などの史料は非常に少なく⁽⁷⁾、書簡も稀にしか見られない⁽⁸⁾。『名媛尺牘』の類の刊本などもあるが、駢文で書かれたものがほとんどであり、日常生活に関する記述は極めて少ない⁽⁹⁾。そのため、道光元年冬(1822年)に刊行された陳爾士著『聴松楼遺稿』に収められた家書(家庭のことを記した書信)は、清代中後期における女性知識人の生活実態を理解する上で貴重な資料といえる⁽¹⁰⁾。これらの家書は白話に近い文体で書かれており、陳爾士の夫である錢儀吉が亡き妻を記念するために整理・刊行したもので、意識的に創作された文学作品ではない。言い換えれば、これらの家書は、陳爾士本来の文章に近いとみなしても良い。もちろん、陳爾士が亡くなった後に整理・刊行された家書は、錢儀吉の添削を経たことで、家書の原形から多少乖離している可能性も否定できない。

伝統中国社会において、筆墨は閨閣より出ないことが女性の道徳と見なされたため、女性が残した文字資料は非常に少ない。ごく限られた資料から、過去の女性知識人の生活の実態を復元することと、彼女たちの残した声を再現することが、本稿の目標である。ここで、本稿で使用する「女性知識人」の定義について補足しておきたい。従来の研究では「閨秀」や「才女」といった伝統的な表現が多く用いられるが、これらの言葉に伴う固有イメージを払拭するために、本論文ではあえて「女性知識人」という現代的な表現を採用する。つまり、本論文で言及する「女性知識人」とは、士人家庭や読書階層の出身で、一定の教育を受け、教養を備えた女性を指している。

先行研究は陳爾士家書の価値に注目し、清代士人家庭における女性の生活を研究する上で特異な資料として位置づけている⁽¹¹⁾。ところが、先行研究は陳爾士家書に触れられている人名などの点について詳細な考証を加えなかったため、これらの家書がどのような環境のもとで書かれたのかについて、十分に理解できていない。また、家譜や族譜において女性成員の情報は往々にして欠落しており、この状況に対して補足や考証を加えずに議論が展開されている場合が多い⁽¹²⁾。さらに、先行研究は主に陳爾士による息子への啓蒙教育に焦点を当てているが⁽¹³⁾、陳爾士と家庭の女性成員、とりわけ娘たちとの関係につい

ては十分に考察していない。これらの問題は、従来の女性史研究に共通した課題でもある。従来の研究は、文学鑑賞的または文学評論的な視点から女性詩文を解読したり、女性詩文のみを対象に分析を展開したりすることが多く、緻密な考証が不足する場合が多かったためである。

本稿は、これらの課題を解決するために、『聴松楼遺稿』を中心資料とし、錢儀吉の既刊著述や未刊稿鈔本、『廬江錢氏年譜』『廬江錢氏年譜続編』などの族譜・家譜資料を利用し、まず陳爾士の育児・家政などの実態を解明し、陳爾士の生涯を改めて考察したい。次に、錢儀吉の家譜に欠落している女性成員の情報を補完し、女性成員間の情緒的な紐帯と、彼女たちを含む錢氏一家の文学や史学の伝統について検討したい。そして、陳爾士の死後、彼女が如何に記念されたのかについても注目し、清代中後期から清末民国期にかけて、女性知識人の作品が如何に刊行・流通・評価されたのかについて明らかにしたい。なお、副題に「陳爾士家族」という表現を使用しているが、ここでの「家族」は従来の父系家族という意味ではなく、陳爾士を中心とした錢氏・陳氏の家庭成員を指している。

I 陳爾士の生涯

陳爾士は、乾隆五十年三月二十七日（1785年5月5日）戌の刻に浙江省杭州府餘杭県黃湖黃回山止戈郷（今浙江省杭州市餘杭区黃湖鎮）に生まれた。祖父の陳筵は科挙試験に合格できなかったため、商売の道に進み、莫大な財産を築き、他人に対して非常に気前が良かった人物とされている。祖母は戚氏である。父の陳紹翔、字鳳翬、号東園は、乾隆六年（1741）五月二十一日に生まれ、同六十年四月十六日に死去した。十六歳（本稿中の年齢は数え歳で表示）の時に陳筵の病気のため、科挙の受験をやめて、家業を引き継いだ。最初に捐納で同知の官を得て、そののち「川運事例」⁽¹⁴⁾にしたがい、捐納で員外郎という肩書を得て、刑部直隸司に補せられた。蔵書を好み、初彭齡や秦瀛などの学者と交流を持った⁽¹⁵⁾。母は蔡氏であり、乾隆十年（1745）前後に生まれた⁽¹⁶⁾。長兄世望は国子監生であり、次兄世杰は候補主事であった⁽¹⁷⁾。

乾隆五十二年（1787）、当時五歳の錢儀吉は外祖父の戚朝桂とともに浙江省嘉興府海塩県袁花鎮（園花鎮とも表記）に住んでいた。陳紹翔はしばしば戚朝桂に会う機会があり、その際に錢儀吉を見て、非常に気に入り、娘との婚約を決めた。ちょうど前年に、錢儀吉の父錢福胙が郷試に及第して挙人になり、次いで咸安宮教習の選抜にも合格して北京に赴いていた⁽¹⁸⁾。その後、錢家の旧宅は他人に賃貸され、錢儀吉一家は住む家もなかった。母の戚芷生⁽¹⁹⁾は長女の慶韶と儀吉を連れて袁花鎮の実家に八年間にわたり滞在した⁽²⁰⁾。

錢儀吉の詩文には全く触れられていないが、錢福胙は財力に富む戚氏に婿入りしたようである⁽²¹⁾。清代江南地域において、錢のように貧困のために婿入りした学者が少なくない⁽²²⁾。

錢氏一族は錢陳羣の時に隆盛を極め、数代にわたって高級官僚や学者を輩出し、嘉興において有数な名門であった。しかし、錢福胙の代に至ると、経済的に困窮する子孫が少なくなかった。錢儀吉と陳爾士の婚約が決まった時、錢氏一家を支えていた錢福胙は未だ会試に合格していなかったため、財力があり詩書を好む陳紹翔と姻戚関係を結んだのは、適正な選択であったといえる。陳紹翔は娘を錢家の家柄に相応しい嫁になるよう教育することを約束した。そのため、陳爾士は子供の頃から兄の世望・世杰とともに母方の叔父のもとで古典を学んでいた⁽²³⁾。乾隆五十四年（1789）秋、陳紹翔は湖州の書估から待望の蘇浚著『易経児説』を購入し、同五十六年夏に木活字で本書を重印した。これは陳爾士らに『易経』を学ばせるために刊行したのだと考えられる⁽²⁴⁾。このような教育を受けた陳爾士は、幼い頃から儒教の礼法を守り、父が世を去った時僅かに十一歳だったが、すでに儒教式の喪礼を心得ていた。彼女は早くに詩文の才能を示し、十四歳で「戊午秋日江樓遠眺」という詩を作った⁽²⁵⁾。

一方、乾隆五十五年（1790）、錢福胙がようやく庚戌科会試に合格したため、三年後、錢儀吉は母とともに北京に赴き、詩文や挙子業を学び、北京における一流の学者と交流する機会を得た。その後、福建学政に任ぜられた錢福胙に連れられて福建に赴いた。嘉慶六年（1801）夏、錢儀吉は郷試に参加するため故郷に戻り、浙江省第22位の挙人として郷試に及第し、同年十二月、陳爾士と結婚式を挙げた。陳爾士は母蔡氏から2,000両余りの持参金を錢儀吉の書籍代として受け取った⁽²⁶⁾。この頃、錢福胙は翰林院侍読に抜擢され、錢家の経済状況は以前と比べると大幅に改善されたはずである。

しかし、福建から北京に戻る途中、錢福胙は体調を崩したようで、大運河沿いの淮安清江浦を経た際、病気のため故郷に戻ることを朝廷に報告し、南へ引き返した。そして、嘉慶七年三月に家に着いた。旅で疲れ果て、病状を悪化させたのか、錢福胙は帰郷してから一ヶ月も経たずに急逝してしまう⁽²⁷⁾。一家の経済状況は再度困窮を極めることになった。服喪期間に、儀吉は家族と一緒に実家で過ごし、儒学に専念し、生計にほとんど関心を示さなかった⁽²⁸⁾。

嘉慶十年（1805）春、喪の明けた錢儀吉は北京に赴いて会試に参加し、同年四月十六日に北京を離れて帰郷の途に就いた⁽²⁹⁾。同十一年七月六日、陳爾士の長女が嘉興で出生し、天孫と名付けられたが、翌年七月十八日に夭折した⁽³⁰⁾。爾士は一男二女を産んだが、天孫の後に生まれた長男衍徽も夭折した⁽³¹⁾。同十三年春、会試に一度落ちた儀吉は再び北

京に赴き、四月に会試に合格して進士になり、庶吉士に選ばれた⁽³²⁾。彼の進士合格時の年齢は、当時の進士合格の推定平均年齢（三十六歳）よりもはるかに若い⁽³³⁾。同十五年（1810）、陳爾士は残りの持参金（500両）を旅費にあてて、慶詔夫婦とともに戚太夫人に付き添い北京へ赴いた⁽³⁴⁾。同年夏、一家は永光寺中街に移居した⁽³⁵⁾。錢儀吉の収入だけで一家を養うのは難しかったようであり、陳爾士がしばしば「釵珥を典し、衣服を鬻ぎ、かろうじて生計を立てる」ことを行なった。彼女は長詩「典釵」の中で次のように心境を述べている。

家は貧しくて生計を立てるのが難しく、日々の生活費が常に足りない。かめの中に僅かの米もなくなり、箱を開けてみると一銭も残っていない。ただ一本の金釵が残っており、それは親からいただいた嫁入り道具である。これ（金釵）を質入れすれば多額の金に値し、高く売れるだろう。婢女に釵を渡し、早速質入れに行かせようとした。小婢はこの釵を持ちながら右往左往し、前に出て話をした。昨日、金持ちの婦人を見かけた。袖が広く襦が薄衣で作られ、白い腕には金釧があり、黒い鬢には明るい真珠が垂れていた。これ（金釵）を残して自分を飾るのが良い。なぜ質入れしてしまうのか。婢女に次のように答えた。あなたは幼くてまことに無知である。不運や幸運は互いに往復し、日と月は満ちたりかけたりする。彼女たちのような美人は、自分の美しい姿だけを考えているが、両鬢（の飾り物）は多くの金に値し、民の膏血を搾り取ったものかもしれない。夫は性格が貞潔にして俗に交わず、任官中に私利を追求しない。五斗の米のために腰を折らず、瓢箪一つだけでも楽しんでい。どうして彼女たちを真似るだろう。構わずに行って、再び疑ってはならない。上に年老いた親がおり、下に幼い子供がいる。親は美味しい食べ物を必要とし、子供は飢寒に耐えられない⁽³⁶⁾。

錢儀吉の詩文集や日記から見れば、彼は社交につとめることにあまり興味がなく、長らく清貧な生活をしていたことがわかる。したがって、詩に言及されている錢儀吉の性格は、おそらく写実的な叙述である。先行研究はしばしば清代京官の収入の低さとその理由に関して検討を加え⁽³⁷⁾、清人詩文集には関連の記述も多く見られる。錢儀吉一家の北京での生活は困窮を極めたため、陳爾士は頻繁に首飾りや衣服を典売（質入れ）することで家計を助けた。数年後、彼女の持参金はついに底をついた。嘉慶十九年（1814）、戚太夫人は記帳などの家政を陳爾士に委ねた⁽³⁸⁾。しかし、詩文や学問の素養を有する陳爾士は、帳簿管理を煩わしく思ったようである。帳簿の細目には飲食・日用・器具などの項目があ

り、僕人（下男）による杜撰な支出が多く、錢儀吉夫婦は僕人をうまく管理することができなかつたようである。また、僕人の杜撰な支出に対して、錢儀吉は妻に問題視しないよう説得した⁽³⁹⁾。この一点から見れば、錢儀吉は家計管理の能力がほぼないに等しく、金銭感覚も非常に乏しいことがわかる。このことも錢氏一家の貧困状況と関係しているだろう。帳簿の実物はもちろん現存していないが、沈曾植が母韓氏の日用帳簿について記した描写から、士人家庭の日用帳簿の様子をわずかながら推測できる。清代北京において、支出を記録する簿冊は「帳本」と呼ばれる。帳本のサイズは大と小に分けられ、大きなものは幅が七、八寸で四方形に近く、小さなものは幅が五寸程度で高さが三、四寸の長方形である。沈氏一家は数代にわたって小帳本を使い、頁ごとに上下二列あり、上列に品物名、下列に価格を記入し、一日ごとに総結の項目があると記されている⁽⁴⁰⁾。

嘉慶十九年六月、錢慶韶夫妻は実家に戻り、同年八月に慶韶は産後の肥立ちが悪く死去した。同年冬に初めて戚太夫人は一人娘の死を知り、病気が一層悪化した⁽⁴¹⁾。嘉慶二十二年（1817）三月九日、戚太夫人が病死した。同年秋、錢儀吉が母の棺を故郷へ送った。一家は経済的に困窮していたため、陳爾士は同行することができず、錢儀吉の側室たちや子女と共に北京に残って家を守った⁽⁴²⁾。この年から翌年秋にかけて、陳爾士は錢儀吉と書簡を交わし、北京寓居における家族の近況や子女教育などの家事について詳細に報告した。そのほか、錢儀吉の同僚から捐納銀や香典をもらったことなど社交に関する事項も詳しく述べている。

道光元年（1821）五月二七日、陳爾士は疫病に感染し、数日後の六月二日に三十七歳で死去した。亡くなる直前まで平素の通り幼い子供に『易』を教えていた⁽⁴³⁾。この年、京師でコレラが発生、蔓延したことで数多くの死者が出た。恩科郷試が延期されたのもこのためである。これは清代北京史上有名な疫病であり、史籍に記録が多く見られる⁽⁴⁴⁾。七月十六日、陳爾士の棺は長椿寺の後寮に納められた⁽⁴⁵⁾。錢儀吉は納棺された妻の副葬品を詳しく記録しており、蟒袍・蟒裙・霞帔などの命婦礼服のほかに、包頭（明清時代に流行していた女性の頭巾）・珠花・瑤簪・耳環・面簪（大きな簪、鈿花ともいう）はそれぞれ一つしかなかった⁽⁴⁶⁾。陳爾士は亡くなる数日前に、錢儀吉と後日故郷の山中に戻ることを約束したが⁽⁴⁷⁾、結局嘉慶十五年に上京して以来、二度と故郷に戻ることはなかった。同年冬、長男宝恵は陳爾士の遺稿を整理し、『聽松樓遺稿』四卷・付録一卷として刊行した。陳爾士は三十七歳という若さで生涯を閉じたが、その家族に対して長期間にわたって深い影響を与えた。

道光十九年（1839）、陳爾士の唯一の娘である遠荅が病死した消息を知った錢儀吉は、従弟の錢泰吉宛の手紙の中で、「この娘は実に賢くて孝を尽くしていた。性情の根本的な

ところは彼女の母に似ているが、母よりもさらに聡明であった」と悲しんだ⁽⁴⁸⁾。錢儀吉の娘に対する哀悼から、彼が亡妻を懐かしく思っていることが窺える。翌年、次男尊煌が帰郷中に送ってきた手紙の中で、嫡母の享亭（墓前にある祭祀用の建物）の状況について全く言及していなかったことに対し、錢儀吉は大いに不満を持ち、泰吉宛の手紙の中で「父母に対する心は、忘れてはならない」と記している⁽⁴⁹⁾。陳爾士の棺は後年、浙江海塩洙涇橋の錢氏墓地に埋葬されたが、道光九年に、錢儀吉は妻が残した半枚の布団について詩を詠み、妻の棺がまだ故郷の墓地に葬られていないと嘆いている⁽⁵⁰⁾。

なお、ここで言及している遠苓や尊煌は、『聽松樓遺稿』卷三の家書にしばしば登場する子女である。陳爾士の筆墨は、彼らの幼い頃の様子を精彩に記しているため、陳爾士の育児実態を考察するための重要な資料というだけでなく、子女の名前や出生順位を考証する上でも看過できない記録である。

II 家書から見た陳爾士の家政と社交

嘉慶二十二年秋から翌年秋にかけて、錢儀吉が母の棺を埋葬するために帰郷した際、陳爾士は北京の寓居で子女の世話や教育に心血を注ぎ、親戚や友人と交流し、頻繁に錢儀吉と家書を交わした。陳爾士が残した家書は二十七通あり（表1⁽⁵¹⁾）、「些細なことでも詳細に述べ、道理を見極めていないところがほぼない」と高く評価されている⁽⁵²⁾。陳爾士が亡くなってから二十二年後、錢儀吉は依然として当時のことを忘れられなかった⁽⁵³⁾。これらの家書は言葉選びが質朴であり、従来の閩秀集に収録されている駢文調の尺牘とは異なるため、家書の実態に近いといえるだろう。また、伝統社会における知識人女性の家書は本来公開・出版される可能性が極めて低いため、清代士人家庭の生活の実態を考察する上で、陳爾士の家書は重要な意義を持つはずである。しかし、先行研究は、陳爾士の家書に言及されている多くの人名や家族関係についてほとんど検討を加えていない。そのため、本章は陳爾士の家書に考証を加えて、陳爾士の家政と社交の実態を見たい。これに先立ち、錢儀吉の記した今回の帰郷の際の日程の概略を以下に示す。

私は八月十三日に北京をたち、十一月七日に家に到着した。九日に西水駅前に泊まり、十一日に田舎に赴き、十五日に戻った。二十二日に黃湖に行き、十二月二日に戻った。五日に田舎に赴き、七日に戻った。十四日に田舎に赴き、十七日に戻り、しばらく宝硯齋に滞在した。二十日に嘉興府城に入り、二十四日に田舎に赴き、正月二日に帰り、数日の間病のため療養した。八日から始めて親戚を回って挨拶した。

表1 陳爾士、錢儀吉往復書簡一覽（『聽松樓遺稿』卷三「家書」、錢儀吉日記により作成。原文をそのまま引用）

| 番号 | 陳爾士が手紙を送った日付 | 錢儀吉から送られた手紙の状況と錢儀吉の南下経路 |
|----|-------------------------|--|
| 1 | 嘉慶二十二年八月十四日 | 於八月十三出京。（錢儀吉嘉慶二十三年正月廿日日記） |
| 2 | 八月二十二日 | |
| 3 | 八月三十日 | 通州七日至天津。 |
| 4 | 九月十三日 | 接八月十九、廿一手書。 |
| 5 | 十月初六日 | 前月二十日、得故城所發書。 廿八日、又接到東昌手札。 月之二日、又收到葉差官帶來之札。 |
| 6 | 十月十八日 | 知主人船於月之初三抵清江浦。 |
| 7 | 十月十九日 | 十三日、從山東提塘遞至九月廿五濟寧所發手書。 |
| 8 | 十月晦日 | |
| 9 | 十一月初十日 | |
| 10 | 月日不詳 | 月餘未得手書。 |
| 11 | 十二月初六日に書き上げ、初七日に發送 | 初一收到清江所發信。 今日辰刻接讀禾中所寄之信。 |
| 12 | 十二月十三日 | |
| 13 | 嘉慶二十三年正月初七日 | 接讀丁丑十二月六日所發書。 |
| 14 | 正月廿三日 | 接臘月十九日手札。 |
| 15 | 春分後二日 | |
| 16 | 四月二十七日 | 昨曉隄處交到四月初二日手札。 |
| 17 | 五月初八日 | |
| 18 | 五月初十日 | |
| 19 | 五月十二日 | 今午接到四月廿三日手札。 |
| 20 | 日月闕、五月十八日から五月廿二日に至るまでの間 | |
| 21 | 五月二十八日 | |
| 22 | 六月初十日 | 得京寓六月十日書、即作答、又寄於朮、筍乾二簍。（錢儀吉六月廿九日日記） |
| 23 | 六月廿二日 | |
| 24 | 六月廿五日 | 正在盼南信、頃從查處得六月初四日手書、知五月十二日之京信已收到。 正作札間、又接到汪處二書、知久不得京信。而我處每有南便、必寄數行、何以不到。士處不接南信、亦五十餘日矣。今日連接三信、看來南北盼望者、皆由此耳。 |
| 25 | 六月廿六日 | 今午從曉隄處收到六月初六灯下之札、並英諭、已付誦。 |
| 26 | 七月初四日 | |
| 27 | 七月十二日 | 昨午陳錦至、手書已收到。 |

十四日に呉門に赴き、十六日に黎里に着き、十八日に崑山に着き、二十二日に戻った。三十日に南昌に赴き、広平に滞在すること前後四十日である⁽⁵⁴⁾。

以上のように、北京から大運河を経由して嘉興の実家へ至るのに八十三日かかった。故郷に滞在する間に、田舎（嘉興城外にある銭氏墓園の所在地）、黄湖（妻の家）、外祖父の宝硯齋、黎里（姑母銭与齡の婚家）、崑山（姉婿の家）を訪れた。次に陳爾士の家政を見てみよう。

1 陳爾士の家政

(1) 長男宝恵をはじめとする子女の教育

陳爾士が家書を書いた時点で、銭儀吉には長男阿英、次男阿荷、次女、三女、四女の5名の子女がいた。長男以外の子供はまだ幼かったため、阿英の教育に最も力を入れた。伝統的な士人の家庭にとって、子供は全家族の未来に関わる希望であり、貴重な資源でもある。家族の命脈をつなぐため、銭儀吉は子供や甥・姪を教育することに始終高い関心を持ち、とりわけ長男阿英に心血を注ぎ、しばしば自ら勉強を監督した。

嘉慶十四年、銭儀吉の従子銭宝甫（1771～1827）が補官により北京に到り、銭儀吉と同居した。翌年、陳爾士らは北京に到り、銭宝甫は引き続き儀吉一家と同居した。その際、銭儀吉は自ら長男阿英に学問を授けたが、所用により外出した際には、銭宝甫が代わって阿英を指導した。嘉慶十六年（1811）、銭儀吉の同族三兄銭棫（1780～1835）も北京に来て、時には阿英を教授したこともある。「かつて一日のうちに三人が交替して（阿英を）監督し、長男も誰が本当の先生であるのか知らない。」⁽⁵⁵⁾

親族の力を借りるほかに、銭儀吉は長男のために何名かの教師を雇ったことがある。例えば、嘉慶十九年（1814）四月十四日、秀水の沈樸を招いて阿英を指導することを決めた⁽⁵⁶⁾。沈樸は嘉慶十八年の挙人であり、銭儀吉の従兄銭世錫（1733～1795）の門人である。そのほか、陳爾士の家書には「誠齋先生」について触れたことがある。この教師は金鶚（1771～1819）という人で、浙江臨海の出身、詒經精舎で修業したことがあり、考証学に精通していた⁽⁵⁷⁾。

清代北京において、士人家族が子供のために良い教師を雇うのは簡単なことではなかった。まず考えられる理由は方言問題である。当時、江南人は呉語話者の学者を家庭教師として招聘することを好んだ。後日、銭儀吉が開封の大梁書院で講席を開いた際には、北方人の発音が正しくないため、彼らを教育することができないと不満を漏らしている⁽⁵⁸⁾。次に、長期にわたって務める教師を探すのが難しいという点がある。家庭教師（塾師）と

いう仕事は、順調に科挙を通過できなかった読書人がやむを得ず選択した生計手段であった⁽⁵⁹⁾。物価高騰の北京で長期滞在するのは容易なことではなかったため、家庭教師の流動性はかなり高かった。こうした環境の中で、家庭教育の重要性は言うまでもない。特に啓蒙教育の面で、重要な役割を担った母親や祖母などの女性家族成員は少なくなかった。陳爾士は家書において長男阿英（宝恵）に対して行った読書指導を次のように詳しく述べている。

阿英は『左伝』巻十一、二の二冊を読み終え、同時に「月令」も読んだ。毎日約四十葉を熟読する。夜には相変わらず『左伝』凡例を書き写す。勝手気ままには至らない。(第二通)

毎日、阿英は『左伝』の最も疎い文章の二、三篇を読み、習ったばかりの内容を復習する。巻十一、二を読み終えてから、引き続き以前習った内容を復習する。日々『周礼』を暗記し、五、六葉を熟読する。そのほかは当日の功課単に従って勉強する。一回読み終えると、彼の各書に対する把握程度を知り、順位をつけることができる。(第三通)

英はただ『左伝』のみに甚だ不慣れであり、易・書・詩・周官・儀礼・礼記の上半部・爾雅・四書はまだましである。毎日『左伝』の二十葉、もしくは四、五十葉くらいを熟読し、また以前習った内容を復習する。(第四通)

阿英は『左伝』の隠・桓・莊・閔・僖・哀の四冊だけを熟読しており、そのほかは不慣れであるため、改めて読むべきである。一日に二篇を熟読して暗記するだけで時間が足りないようである。主人が来年春と夏の間に北京に戻るまでに、(阿英が)読み終えるのはただ『左伝』のみである。(第五通)

阿英は最近頗る読書が好きであり、『左伝』の二冊を熟読した。先日策論を作り、少し上達になった。依然として吾亭に添削してもらっており、その原本をお送りする。(第七通)

最近、毎日の勉強を終えた後、依然として『儀礼』を書き写し、少しも散漫にならないようにしている。(第二十四通)

以上のように、錢儀吉は長男に儒学諸經を含む功課単（学習計画表）を立てたことが推測できる⁽⁶⁰⁾。阿英が最も不慣れな経書は『左伝』であるため、この期間の学習は『左伝』に重点を置きながら、同時にほかの経書を復習することにした。そのほか、錢儀吉は『国策』を古文勉強の上で重要な文献とみなし、自ら阿英のために版本を選んだ（第十七通）。

彼の留守中、陳爾士はしばしば潘恭常、すなわち家書において「吾亭」や「潘年伯」と呼んでいる人物に阿英の策論の習作を添削してもらっていた。潘恭常は浙江錢塘の人、錢儀吉と同年に進士及第した友人であり、二人が非常に親しかった⁽⁶¹⁾。潘恭常が阿英の習作をわかりやすく丁寧に訂正してくれたことに対し、陳爾士は錢儀吉に潘恭常へ感謝の手紙を速やかに送るよう促した（第九通）。陳爾士は自分が古文を知らないと謙遜したが、実際には嘉慶十九年（1814）春に宝恵が策論を学び始めた時、手本を示すために何篇かの古文を書いたことがある⁽⁶²⁾。

家書から復元した錢儀吉の子供に対する教育計画を見ると、清人王筠の「教童子法」に記されている啓蒙計画が想起される⁽⁶³⁾。陳爾士は夫の教育計画を徹底的に実行し、病気で宝恵を指導することができない時には、宝恵を錢儀吉の族孫である錢聚仁（1788～1852）のところに読書に行かせたこともある（第十五通）。

一方、まだ襁褓に包まれている次男阿荷に対して、陳爾士は幼児教育を施した。嘉慶二十三年（1818）は立春のない「盲年」にあたり、伝統的慣習によると、子供に対して読み書きの手解きを始めるのに不適切な年だと考えられていた。そのため、陳爾士は同二十二年の十二月に阿荷に読み書きを始めさせることを決め、『千字文』を教えた（第九通）。

また、娘たちの教育に対しても、陳爾士は怠らなかつた。彼女から生まれ、無事に成長した唯一の娘（次女）に特に深い愛情を注いだ。「十三日、願女は八行の文字を書き、六回読んで暗記できた。彼女は極めて自慢している。三日、三女を学生として仕込み、日ごとに二字を教え、なんと覚えてくれた」（第七通）、「毎日夕方、次女は兄に『爾雅』の中の五十文字を教えてもらう。これを通して、英は『爾雅』をより深く学ぶことができる。互いにとって有益なことである。彼女は勉強するのが頗る好きだが、惜しいことに女である」（第十八通）、「願寿は大字を書くのが好きだが、良い手本がないことに困っている。暇を得れば手本を一枚書いてくだされば幸いである」（第二十三通）などの記録のように、陳爾士の慈愛は家書から十分にかがいがい知ることができる。

（2）病名の判断と漢方の処方

錢家の一族は皆病弱な体質であり、遺伝病の可能性もあり、とくに乳幼児死亡率が非常に高かった。錢慶韶が北京に住んでいた間、天然痘のため二人の幼児を失った。これに対して、錢儀吉は姉婿の李培厚について「医を知らない」と評し、嘆いた⁽⁶⁴⁾。このような例は、乳幼児死亡率が極めて高い時代に、親がある程度の医学的知識を有する必要があったことを物語っている。実際に、清人詩文集、日記、書信などの資料では、読書人が自分自身や家族に漢方を処方する記録が多く見られる。もちろん、その効果については別問題

である。

子女を相次いで失った陳爾士は、医学的な知識を学び始め、次第に幼児の病名や漢方の処方に関する知識を身につけていった。家書には、陳爾士が頻繁に子女の病気に言及し、それぞれの処方について詳細に報告している。その中で、医者処方してもらった薬についても触れている。たとえば、阿荷の後頭部に癩が出て、膿が多くとまっているのに対して、医者文之瑗は四聖湯加減という薬方を決めた（第二通）。常に疲労を感じ、胃気がよくない阿英の場合には、二名の医者に診察してもらい、左右関脈不和、つまり肝脾不和と診断され、補脾益気の薬方を受けた（第二十一通）。

一方、陳爾士が子女の症状に基づき病名を判断し、自ら漢方を処方したこともある。嘉慶二十三年春、陳爾士は眼病に見舞われた三女に「大息肝火之品方」を指定して服用させたが、「赤みや痛みがすでに治ったが、上翳がさらに大きくなった。北京では適切な治療ができない」と述べ、錢儀吉に「南方では移星草があり、上翳を治療するには甚だ効く。時まさに春深き草が茂るにあたり、北へ戻るときに、くれぐれも（移星草を）探して少し持ち帰ってきて欲しい。この草は新鮮なものが一番よく、上翳を治療できる。泥とともに持ち帰らないと効果がない」（第十五通）と願った。移星草を求めることから見れば、陳爾士は北京の薬材より故郷のものをより信用していたことがわかる。同年五月初、平素から病弱であった陳爾士は「消痰補気」の薬を飲んでしたが、北京では良質な補気薬材と見なされる於朮（白朮）の入手が困難であったため、錢儀吉に買って送るよう依頼した。では、陳爾士はこのような病気や薬材に関する知識をどこから得たのだろうか。乾隆年間の名医黄宮繡が『本草求真』に白朮を「脾臟補気の最も重要な薬」と定義し、「浙江於潜で産出されるものは潜朮と呼ばれ、最も良い」と指摘している⁽⁶⁵⁾。直接的な史料はないが、蔵書を多く持つ錢儀吉の妻として、以上のような医学書や漢方書を読む機会を得るのは難しくなかったと推測できる。

江南から於朮を送るのに時間がかかったため、陳爾士は一旦自分で処方を変え、於朮の代わりに薏苡仁を用いた。この修正後の薬方を一ヶ月余り飲み、効果があると述べている（第十九通）。その後、錢儀吉から送ってきた於朮がようやく北京まで届き、陳爾士は「今回お送りいただいた於朮は甚だよい」（第二十通）と感謝した。

また、医薬知識を的確に活用するほか、陳爾士は完璧な道徳を備えるべきだと期待されていた。道徳を備える母でなければ、天の神に同情されることもなく、子供が無事に成長することもできないとされたからである。戚太夫人は自分の経験に基づき、陳爾士と錢慶韶に対して次のように教え諭したことがある。

我が子を産んでから、度重なる災難があり、私は益々謙讓をもって世に処する。言葉や行動をするときに、人を傷つけることをいつも恐れている。天が我が子を憐れみ、我が子を成長させるよう願った。君たちはそれぞれ子女を持ち、私が言っていることを心に留め、徳を積んで自愛した方が良い⁽⁶⁶⁾。

幼少期に度々重病を患った錢儀吉は、母の献身的な看病のおかげで無事に成長した。錢儀吉は母の言葉を次のように記している。

私はこの子を産んでから、一言や一行をするたびに、我が子の険しい病気を一度も忘れたことがない。物事を処理するときに必ず謙り、言葉を発するときに必ず謙遜な態度を取り、時々刻々天に祈り、我が子の命を保つことができた。本当に幸いなことである⁽⁶⁷⁾。

以上のように、度重なる幼児夭折の恐怖のなかで、身につけた医薬知識を活用して子供を看護することや、常に完璧な道徳を備えることは、陳爾士が常に担うべき重い責任となった。

(3) 家計管理

次に、錢儀吉北京不在中において、陳爾士が家書に記した家庭収支の状況を見てみよう(表2)。この時期における主な収入は、外捐銀(合計175両12銭)、質屋から借りた金額(40両、8,500文)、ものを売った金額(60両)、親戚(二伯父、宮保、滇中)や進士同年の友人(呉増嘉、謝階樹)からもらった香典(64両)、親戚(菘翁)からもらった扶助金(月10両)などがある。

収入総額のうち高い割合を占める外捐銀は、すなわち印結銀であり、俸禄が低い清代京官にとって非常に重要なものとみなされている。伍躍が指摘しているように、印結銀の財源は報捐者が収めた印結手数料であり、月毎に決算・分配されるため、地元からの報捐者の人数は、京官たちの印結銀収入に直接影響を与えたのである⁽⁶⁸⁾。そのため、130両6銭を受領する時(嘉慶二十二年八月)もあれば、18両6銭を受領する時(嘉慶二十二年九月)もある。後者について、陳爾士は「さらに一ヶ月持ちこたえられる」(第四通)と言った。つまり、少ない時でも、一ヶ月分の印結銀は錢氏一家の生活を支えるに極めて重要な収入である。

家書に記されている支出の中で、最も大きなものは嘉興への送金である。たとえば、外捐銀(嘉慶二十二年八月分)の50両を錢聚仁に預け、5万7,000文に両替してもらい、切

表2 陳爾士家書に記された収支決算明細（『聴松楼遺稿』卷三「家書」により作成。原文をそのまま引用、漢数字を算用数字に変換、括弧書きで注釈を付ける）

| 手紙日付 | 収入 | 支出 | 貯金 | 借金 |
|------------------------|--|--|-------------------------|--------------------------------------|
| 嘉慶二十二年八月十四日 (第一通) | 昨帰後、有同衙門魏公(魏成憲)来、交到外捐銀130兩6錢 | | 大衍之数(50兩) 存本之(錢聚仁) 処 | |
| 八月二十二日 (第二通) | | 前交本之銀50兩、易錢57,000、擬俟湊足一數、從吳処寄南中、以備正用 | | |
| 八月三十日 (第三通) | 典物銀40兩 | 奉上30兩、付去人4兩 | 存6兩作家用 | |
| 九月十三日 (第四通) | 珠花已銷去、価紋銀60兩 昨典去簪一枝、大錢8,500文 今早雨楼(趙光祿)遣人送到外捐銀18兩6錢 | 寓中晚間時有小竊、不得已雇一更夫、每月工錢800文 | | 託本之(錢聚仁)致菘翁(吳璣)、暫借100,000(文)、湊二數会南応用 |
| 十月初六 (第五通) | 菘翁(吳璣)每月幫銀10兩 広宗吳公(吳增嘉)寄奠金6兩 | 会大錢300,000存大兄(錢希憲) 処 | | |
| 十一月中 (第十通) | 魏春翁(魏成憲)又送到外捐銀27兩 | | | |
| 十二月十三日 (第十二通) | 二伯父(錢臻)寄40兩、宮保(吳璣)18兩 | | | 本之(錢聚仁) 処借一數 |
| 嘉慶二十三年正月二十三日 (第十四通) | 滇中(錢宝甫)年底寄到唁函及奠分 | | | |
| 春分後二日 (第十五通) | | 卸馱煤幾及3,000(文)、較之向來零買、一年可省數十千 | | |
| 四月二十七日 (第十六通) | 向亭(謝階樹)此月中旬寄到奠分 | | | |
| 五月初十 (第十八通) | | 会錢60,000文 | | |
| 五月二十八日 (第二十一通) | | 楊元(錢儀吉の僕従)之兄持楊元信来、欲支大錢2,000(文)(中略)是以竟与之矣 | | |

りの良い額を嘉興に送った。また、質屋から借りた金額（40両）のうち30両を嘉興へ送金した。そのほか、北京の寓居に泥棒が入ったため、月800文の給料で夜番を雇ったり、冬場用の石炭を一括で購入したり（3,000文）、僕人に2,000文を支給したりすることもある。「毎日朝から出て書屋にいて、申酉の交（夕方の頃）に部屋に戻り、雑務を処理し、なかなか暇がない」（第二通）という記述のように、陳爾士が様々な雑務に追われていた様子が家書から窺える。

（4）北京の官界事情を錢儀吉へ報告すること

陳爾士は家書を通して錢儀吉到北京官界の最新情報を報告したことがある。まず、嘉慶二十三年五月、錢儀吉の親友である潘恭常が書吏の不正行為のため、御史に弾劾され、刑部に赴き尋問を受けた件である。陳爾士は何度も家書でこの事案に言及し、その最新状況を報告した。さらに夫を慰めるために、「吾亭は平素から慎重であり、私見としてはおそらく監督不行き届きの処罰だろう」（第二十一通）と自らの意見を述べた。七月三日、潘恭常が罷免され、拷問にかけて尋問されるという処分が公表されたが、陳爾士は家書でこの件に関する疑わしい箇所を指摘し、最終判決が出るまで証人尋問を経る必要があると判断している。七月中旬、陳爾士の予想通り、潘恭常は復職し、処罰は免除され、冤罪が晴らされた。潘恭常が帰宅した後、錢儀吉の心配を払拭するために、陳爾士はすぐに宝恵を見舞いに行かせ、その日のうちに夫への手紙を書き終えた（第二十七通）。陳爾士は家書で常に自分には才能が不足していると謙遜していたが、実際には内外の諸事、特に錢儀吉と関わる人事について通暁していた。錢儀吉が彼女に対して「孤独の身であなたを兄弟のように頼りとする」（孤生倚爾如兄弟）⁽⁶⁹⁾と感嘆しているのも頷ける。

次に、陳爾士は嘉慶二十三年の『欽定明鑑』案⁽⁷⁰⁾について詳しく報告したことがある。「昨日邸鈔を読み、『明鑑』の体裁には不備がある。秀師は頭等待衛として新疆に赴いて勤務交代をする。纂修の張公は罷免された。蘭右先生は編修に降格された。今後『会典』が完成されたら、ただ罪に問われないことを求めるのみである」（第十七通）。「秀師」とは嘉慶十三年会試の副考官である秀寧のことで、「張公」とは張岳崧のことで、「蘭右先生」とは朱珔のことである。『会典』の件は、すなわち錢儀吉が当時『嘉慶会典』の編集に参加していたことを指している。陳爾士は時事を論じることを自戒していたが、邸鈔（宮廷の動静や皇帝の論旨などをまとめて掲載した小冊子。邸報、京報ともいう）を閲読し、家書を通して北京官界の最新情報を夫に早速伝達していたことから、彼女が錢儀吉の仕事内容、ひいては朝廷の動向について詳細に理解していたと推測できる。

2 陳爾士の社交

(1) 手紙の発送と受領

嘉慶二十二年八月十二日、陳爾士は子女を連れて、嘉興へ旅立つ錢儀吉を見送り、当日正午に寓居に戻った。錢儀吉は当日戌の刻に船に乗った。族孫の錢聚仁は陳爾士一行より少し遠いところまで錢儀吉を見送り、同月十四日に錢儀吉から陳爾士宛の書き付けを持ち帰ったが、その中には十五条の依頼事項がある（第一通）。

実家への帰路に、錢儀吉は友人のところの「便人」（手紙を送る人）・提塘⁽⁷¹⁾・差局（民信局）など種々の手段を利用し、書簡を北京へ送った。その中で、最も多く利用したのは「便人」である。たとえば、陳爾士の家書に「昨日暁隄のところから四月二日の手札が送られてきた」（第十六通）と言う記述がある。暁隄は汪如瀾であり、浙江秀水人、兵部職方員外郎に進んだ⁽⁷²⁾。彼の妻である查若筠は刑部郎中查世倓の娘であり、字は珮芬、詩文の才能に恵まれた⁽⁷³⁾。查世倓の息子元偁は錢儀吉や潘恭常とともに嘉慶十三年に合格した進士であり、刑部直隸司員外郎・戸部山東司員外郎・刑部雲南司員外郎・刑部江蘇司員外郎などを歴任した⁽⁷⁴⁾。なお、潘恭常は汪如瀾の外甥にあたり⁽⁷⁵⁾、汪如瀾の従兄如洋の長女を娶った。錢儀吉は潘恭常と特に親密な関係を有し、「君と交流した三十年間、互いに志が通じる」⁽⁷⁶⁾と語った。これによって、錢儀吉は查世倓一家の情報通達ネットワークを利用した可能性が十分あるだろう。

一方、陳爾士は北京から錢儀吉に書簡を送るときも、しばしば夫の友人のところの「便人」を利用した。すなわち家書に言及した「暁隄処」「查処」「查足」のことである。たとえば、「七日に查処から手紙一通を送り、二十五、六日の後に届けると思う」（第十二通）、「查処の人は明日朝に出発するため、取り急ぎこれを書く」（第十三通）、「ただ北京では於朮がなく、各所で買ったものは全て使えない。便人がいれば（於朮を）少し買って送ってきていただきたい」（第十七通）、「今のところ查足があると聞いたため、改めて数行を書き上げ、無事を報告する」（第二十二通）などの記述が見られる。そのほか、「孫啓が北京に戻った後、すでに二通の手紙を送った。一通は汪処に渡し、一通は葉に渡した。両垞が江南に帰った時、杏仁一包みを送り、今月末来月初に到着できると思う」という記述もある。ここでの「葉」や「両垞」は、葉維庚（1773～1828）を指し、彼も秀水出身で、嘉慶十九年に合格した進士であり、翰林院庶吉士、同二十二年に散館後に知県に任ぜられた⁽⁷⁷⁾。

陳爾士の二十七通の家書の中で、「差局」（民信局）から送った一通がある。嘉慶・道光年間、民営の郵便事業者がすでに出現していたが、相当高い送料を払う必要があった⁽⁷⁸⁾。そのため、当時の人は個人的な書簡や物品を届ける際に、民信局よりも、提塘や友人に託

すといった方法を好んだ⁽⁷⁹⁾。このような方法は確かに便利かつ低廉であるが、信使の来るタイミングを待たなければならない。陳爾士はかつて「連続して二通の手紙を書いたが、便〔書簡を届ける機会〕がないため送っていない」（第十九通）ことがあった。痔瘻の病気に悩んでいた錢儀吉のために、陳爾士是北京の象房で象牙⁽⁸⁰⁾（先端部分、重さは六両五錢）を購入し（第七通）、しばらく待っていた後、錢儀吉の姑父吳璣のところから嘉興へ送る機会を得た（第十通）。

（2）印結銀の代理受領

前述した錢家の家計を支えた印結銀は、原則として毎月支給されたが、家書には嘉慶二十二年八月・九月・十一月の分のみが記されている。この三ヶ月の印結銀はそれぞれ「同衙門魏公」「雨樓」「魏春翁」により送られてきた。「同衙門魏公」「魏春翁」とはすなわち魏成憲のことで、字は宝臣、号は春松、浙江仁和人、乾隆甲申（1764）年の進士である。魏成憲『仁庵日記年譜』には、「丁丑（嘉慶二十二年、1817）、仁庵年六十二歳、在農曹管理捐納房事」⁽⁸¹⁾と記されており、この年に魏成憲が戸部で捐納房の仕事を管理していたことがわかる。「雨樓」とは錢儀吉と同年に及第した進士の趙光祿のことで、字は星藜、号は雨樓、浙江歸安の人、翰林院庶吉士に選ばれ、散館後に錢儀吉と同じく戸部主事に任ぜられた。以上のように、錢儀吉は印結銀の代理受領を陳爾士に委ねており、夫婦間で同僚に関する情報を共有していたことがうかがえる。

（3）錢家の親戚との付き合い

前述したように、戚太夫人が亡くなった後、錢家の親戚から北京の寓居に香典や扶助金が届けられた。それらの親戚の内、「二伯父」とは錢陳羣の長男汝誠の次男錢臻のことである。「宮保」や「菘翁」とは錢儀吉の姑父である吳璣のことで、浙江錢塘の人、乾隆四十三年の進士、安徽学政・河南布政使・河南巡撫などを歴任した⁽⁸²⁾。吳璣は錢儀吉の祖父である錢汝恭の厚遇を受け、汝恭の娘を娶り、錢儀吉の父や伯父らと親交を持っていた⁽⁸³⁾。嘉慶二十三年正月二十二日、陳爾士は、徐州・青州での黄河治水工事の調査を終えて北京に戻ったばかりの吳璣を訪れた（第十四通）。「滇中」とは錢宝甫のことで、嘉慶十九年に彼は知県に任ぜられ雲南澂江府に赴いた⁽⁸⁴⁾。

そのほか、陳爾士は錢家の親戚を熱心に世話していた。家書の第五通に述べているように、「四房大弟が移居しようとしている。本之（錢聚仁）が相談に来た。私は直ちに西院の三つの部屋を片付けて、弟が住めるように招いたが、弟はまだ（来るかどうかを）決めていない」ということはその一例である。「四房大弟」とは錢陳群の四男汝隨の長孫景曾のことである。もう一例挙げると、家書の第二十通に、「済南三弟は五月五日到北京に着いた。甚だ物静かな様子で、派手な習慣は全くない。我が一族のなかで期待できる人物で

ある。六伯父から世話をしてもらいたいという手紙をもらった。時々人に（三弟を）訪問させるようにしている。（彼は）家で読書し、外に出ない。あなたが済南へ手紙を送るとき、このことについて言及した方が良いと思う」と述べている。「六伯父」とは錢汝誠の三男錢俊のことで、祖父を同じくする孫たちの順序で言えば六番目にあたる。「済南三弟」とは、錢俊の三男燕昭のことで、道光十四年に副榜に合格して挙人になり、のちに兩淮塩課大使に任ぜられた⁽⁸⁵⁾。

これと対照的に、陳爾士の実兄に対する態度は非常に興味深い。錢儀吉は帰郷の際、妻の母と兄を訪問し、資金援助を得た。おそらく錢儀吉は妻宛の手紙に感謝の意を表した。これに対し、陳爾士は「最も慰めになるのは、母が健康で、精神や顔色が普段と変わらないことと、二人の兄が家業を慎んで守り、母に孝行をすることである。援助金については、親戚同士なら当然なことである。以前次兄が北京を出る時に、随時に（我々を）援助すると話したこともある」（第十三通）と温かく答えた。陳爾士の次兄陳世杰（号は友石）は姉婿の錢儀吉と親交があり、おそらく何らかの仕事の機会を探すために、かつて北京に滞在したことがあるが、嘉慶十八年に故郷に戻った。ちょうど今回錢儀吉が帰郷した際、陳世杰は出仕しようと考え、姉婿に意見を求めた。これに対し、陳爾士は、兄は実家で母の面倒を見るべきだと強く反対した（第二十四通）。一方、陳世杰も妹に手紙を送り、その旨を伝えたようである。しかし、陳爾士は依然として次兄の出仕計画に異を唱えた（第二十六通）。

儒教的な観念から言えば、結婚後の女性は生家の成員ではないため、実兄の人生計画に対して口出しする権限がないはずである。しかし、陳爾士は母に孝養を尽くすという原則に基づき、次兄に出仕の計画をやめるよう強く説得することを夫に頼んだ。結局、陳爾士の次兄は「候補主事」という実権の伴わない肩書きを得ただけで、長兄とともに郷里で家業を守り、地方志においてごく簡単な記録しか残さず、平凡な人生を送ったようである⁽⁸⁶⁾。陳世杰が詞の中で妹を班姬（曹大家）に譬えることから、彼が妹を重んじていたことが推測できる（第十三通）。では、なぜ陳爾士は次兄の出仕に強く反対していたのか。現実的な理由として、莫大な金額を使って官職を購入しても、実缺を取得するまでの待ち時間は運次第であり、家族に十分な利益をもたらすことが保証できないということが挙げられる。

以上のように、清代士人家庭の女性知識人は、家庭内のことを担当するだけではない。彼女たちは「内」の範疇をはるかに超えた情報を幅広く把握し、家族や官僚社会について「外」で生計を立てていた男性と様々な情報を共有し、明確な見解を持ち、運命共同体としての夫を守ることもあった。

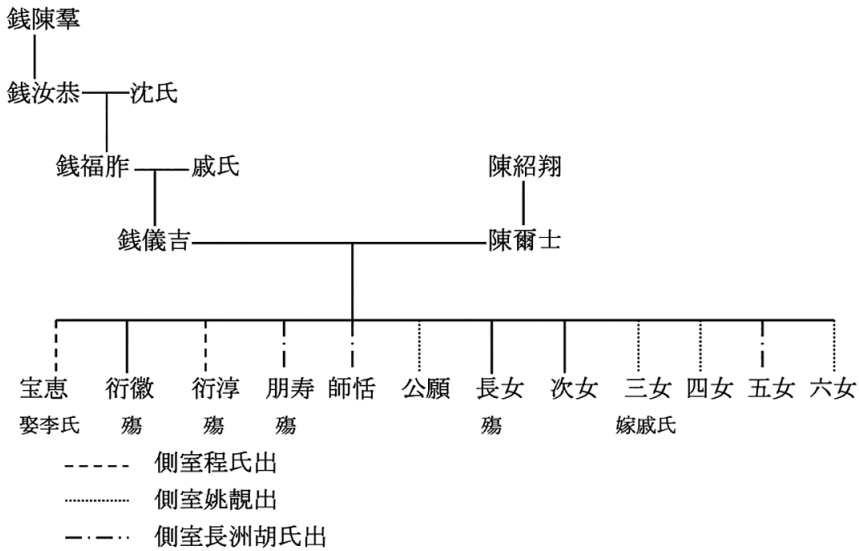


図1 錢儀吉、陳爾士家系略図

出典：錢臻等修撰『(海塩) 錢氏家譜』(道光六年顯忠祠藏版) により作成

III 錢儀吉子女の名前と婚姻関係

前述のように、陳爾士は家書で五名の子女の日常生活を詳しく記した。これらの子女は年齢が不揃いで、陳爾士から生まれた次女頤寿を除いて、みな側室たちから生まれている。手紙では子女をすべて幼名で呼称しているが、錢氏家譜や伝記などの資料に記録されている人名との対応について確認したい⁽⁸⁷⁾。錢儀吉の大梁書院時代の弟子である蘇源生が「書先師錢星湖先生事」には次のように述べられている。

先生には子が四人いる。長男は宝恵、道光丁酉副榜、庚子の挙人、『説文義緯』を著したが、完成せず亡くなった。その次は尊煌、候選刑部司獄。その次は鬯醇、道光庚子の挙人。その次は彝甫、生員。娘が三人いる。孫が三人いる。長孫は栢、道光甲辰の挙人、庚戌進士。次孫は元絳、生員。その次は杞。曾孫は炳文⁽⁸⁸⁾。

『清儒学案』錢儀吉条の後に宝恵の小伝が附されているが、そのほかにはただ「弟の宝宣、字は徐仙、同榜挙人」と記されているのみである⁽⁸⁹⁾。道光六年に錢臻らが修撰した『(海塩) 錢氏家譜』では、第三支太常房錢儀吉条の下に次のような項目が記されている(図1)。

保恵、儀吉長子、字子万、号淡軒、国子監監生、生□月□日、娶昆山李氏戸部主事女、生□月□日、子呂孫、成孫。

衍徽、儀吉次子、殤。

衍淳、儀吉三子、殤。

朋寿、儀吉四子、殤。

師恬、儀吉五子、字子引。

公願、儀吉六子、字徐山。

保恵程出、衍徽嫡出、衍淳程出、朋寿胡出、師恬胡出、公願姚出。女六。長殤、次未字、俱嫡出。三字徳清戚士雄、四未字、俱姚出。五胡出。六姚出⁽⁹⁰⁾。

家譜によると、錢儀吉には程氏（1787年生）、嘉善胡氏（1791～1807）、長洲胡氏（1791年生）、姚氏（1797年生）という四名の側室があり、いずれも陳爾士より若い。家書でよく言及されるのは程氏であり、彼女は病弱で、毎日裁縫をし、「三人の娘の靴や帽子は全て彼女が作った」（第十八通）。程氏は宝恵の生母であり、側室の中で最も年上であるため、その地位は比較的高かったと考えられる。嘉善胡氏の名は愛珍で、その後硯貞と改名され、嘉慶十二年（1807）七月に錢儀吉の側室になったが、わずか一ヶ月後に亡くなった⁽⁹¹⁾。姚氏の名は靚で、字は琴谿、歙県の人、絵と詩を得意とし、側室の中で最も若く、子女を最も多く儲けた⁽⁹²⁾。陳爾士が亡くなった後、姚靚は長年にわたり錢儀吉の日常生活や史料編纂作業を支えたようである。側室であったため、残念ながら姚靚に関する資料は非常に乏しい。

上記の伝記や家譜などに記録された錢儀吉の子女に関する情報は簡略的で間違いが多いため、先行研究がこれらの資料に基づいて復元した錢儀吉の家系図は当然不完全なものである（付録1）。とくに娘の名前は記録せず、嫁ぎ先の情報程度しか示していない。そのため、詩文集・書簡・族譜・家譜などの資料を利用し、家系図を補完してみたい（図2、図3）。

長男宝恵は嘉慶八年（1803）に生まれ、陳爾士が夫の南帰中に家を守っていた時に、おおよそ十四、五歳であった。嘉慶二十年（1815）、錢慶韶が亡くなった後、しばらくして錢・李両家は宝恵と慶韶の長女李介社との婚約を決めた⁽⁹³⁾。同二十四年（1819）、宝恵は北京から崑山に赴き、結婚式を挙げた。李介社は字を初蘭、号を誦冰・師冰とし、篆書に長じていた。同年十一月二十六日、陳爾士は宝恵に手紙を書き、家のことを詳しく伝え、新婦になった介社の繊細な心境をよく察するよう切実に教えた⁽⁹⁴⁾。しかし、李介社は結婚してから二年も経たずに陳爾士の死を迎えた。道光十二年秋、罷免された錢儀吉は帰郷

し、その後、広東学海堂で二年間教師を務め、さらに職を転々として河南に赴き、大梁書院で教鞭を取った。その間、宝恵一家は北京と開封の間に漂泊していた。錢儀吉の詩に「あなたの母が亡くなってから、閨媛（李介祉のこと）とともに貧困に耐えている」という一句がある⁽⁹⁵⁾。つまり、宝恵夫婦にとって、陳爾士の死は大きな打撃となったに違いない。

陳爾士の家書に見える「荷兕」「阿荷」は、年譜に見える「師恬」及び伝記に見える「尊煌」と同一人物であり、尊讓とも呼ばれ、字は子慮、謙山で、嘉慶二十年頃に生まれた。彼は県試に合格しておらず、錢儀吉の愛情を受けなかったようである。尊煌は捐納により得た低い身分をもって、開封に鬱々として不遇な人生を送っていた。彼の妻は程韻であり、学者の程同文⁽⁹⁶⁾と画家の呉玖⁽⁹⁷⁾の娘として生まれ、字は均仲、詩に長じていた。程韻が亡くなった後、尊煌は沈氏を後妻として迎えた。

陳爾士が家書を書いていた時、錢儀吉の三男宝宣は未だ生まれていなかった。彼は兄たちと同じように、「苞」という草かんむりを持つ字を幼名として名付けられた。妻は秀水の朱秬曾で、字は誦清、錢儀吉の友人朱鴻の娘である⁽⁹⁸⁾。太平天国の乱が起きた後、宝宣は四川に赴き、同治八年（1869）から成都官書局に務め、光緒元年（1875）から成都尊經書院の主講として招かれた⁽⁹⁹⁾。

錢儀吉の四男は彝甫であり、幼名は萇、字は子舟・芷洲・芝舟で、咸豊末に宝宣に追隨して四川に赴き、のちに広東通判を務めた。妻は署理徐州兵備道沈如鎔（1767～1829）の娘である。彼らの長女は如鎔の孫の廷棟と結婚した⁽¹⁰⁰⁾。

続いて、錢儀吉の娘たちのことを見てみよう。子供の夭折を避けるためなのか、長女天孫の次に生まれた娘たちは、みな幼名に「寿」字を持つ。次女頤寿（飴寿とも表記）は阿荷より少し年上で、名前は遠蒼、子供の頃から聡明で、詩文に優れて、特に書に長じ、両親に愛されて育った。道光九年、遠蒼は父の友人である沈炳垣の長男、宝禾と結婚し、しばらく北京に滞在した。翌年、長男善登を産み⁽¹⁰¹⁾、十一年冬によく桐郷の婚家に移った。遠蒼は父と頻繁に文通を交わしていたようだが、残念ながら一通も残っていない⁽¹⁰²⁾。錢儀吉は「三国会要序例」において、「戸部に入った以来、仕事が忙しくなく、長男の嫁李介祉、次女の遠蒼、側室の姚靚は私に原稿の謄写を手伝ってくれた。そして項目が大体立て、首尾を概ね備えた」と述べている⁽¹⁰³⁾。これによって、遠蒼は李介祉や庶母の姚靚とともに、父のために多くの原稿を書き写す仕事を担ったことが分かる。

錢儀吉は詩集に、次女に贈る詩を六首収めている。これらの詩のなかで、「仲女遠蒼挈外孫輩南歸示之詩四首」には、特に強く深い感情が込められている⁽¹⁰⁴⁾。この四首の詩が書かれた時、陳爾士がこの世を去ってからすでに十年が経っていた。錢儀吉が書いた「箱

をかき回しても久しく慈母の線がない」(翻篋久無慈母線)という詩句から、次女を慈しみ、亡き妻を深く懐かしんだ感情がうかがえる。道光十九年(1839)七月初旬、遠苓は病気で亡くなった。錢儀吉は泰吉宛の手紙の中で、「次女のごことは、実に意外だった。病状は彼女の母と少し似ていたが、寿命はさらに短い。幸いに彼女には息子がいる」、「父と娘は遠く離れており、最後になると、父が娘のために涙ぐむか、それとも娘が父のために涙ぐむかのどちらかだ」という悲痛な思いを書き記している⁽¹⁰⁵⁾。錢儀吉にとって、次女の病気や死去は、まるで亡き妻の運命をなぞっているかのように感じられた。しかし、遺憾ながら遠苓のために伝記を書き、遺稿を刊行する人がいなかった。また、彼女が書いたと言われる『敦説齋臚稿』も世に残っていないようである。ただし、錢儀吉の『定廬集』鈔本に収められている遠苓が道光九年に書いた一首の立秋和詩からは、彼女の才華の片鱗がうかがえる⁽¹⁰⁶⁾。

陳爾士の家書に言及された「三小小」および「慈女」は、錢儀吉の三女のごことで、側室の姚靚から生まれた。嘉慶十九年臘月に生まれ、幼名は慈寿、名は仲愉、字は誦懇である。戚朝桂の曾孫である士彦(『錢氏家譜』には「戚士雄」と表記)に嫁ぎ、光緒十八年(1892)に亡くなった。『餘姚戚氏家譜』卷十五「士彦」の条目には、「配は錢恭人、諱は慈寿、字は仲愉、篆隸に精通し、一時期とても有名であった。息子の人銑、人鏞、人鈺、人釗を産んだ」と記されている⁽¹⁰⁷⁾。長男の戚人銑は同治七年(1868)に進士に及第した。

家書に言及された「四小小」は錢儀吉の四女のごことで、名前は叔琬、字は聞詩、こちらも側室の姚靚から生まれた。陳爾士の目から見れば、家書に記録された四女は、離乳したばかりの幼児で、慈寿と同じように「すこぶる腕白で、誰をも恐れない」ということである。道光十六年(1836)に継室として宛平史叔平に嫁いだ⁽¹⁰⁸⁾。道光二十六年(1846)、叔琬は長兄より五十四日早く病没した。尊煌が詩で史叔平を姉婿と呼んでいたため、叔琬が尊煌より年上であることがわかる⁽¹⁰⁹⁾。

以上によって、錢儀吉の子女の名前および出生順位が明らかとなる。長男宝恵(1803～1846)、次女遠苓(?～1839)、三女仲愉(1815～1892)、四女叔琬(?～1846)、次男尊煌(?～1868)、三男宝宣(生没年不詳)、四男彝甫(1824～?)の順となる。その中で、長男・三女・四男は錢儀吉の親戚(姉、母の兄・祖母実家の子孫)の子供と婚姻を結んだ。一方、次女・次男・三男は錢儀吉の同僚(皆浙江省出身)の子供と婚姻を結んだ。息子たちの中で会試に及第したものはいなかったが、幼い頃から陳爾士の教育を受けた娘らは皆詩文に長じ、それぞれの子女の教育に心身を傾注した。その結果、進士に合格した息子(沈善登、戚人銑)もいた。

IV 陳爾士著作の刊刻と流通

本章では、陳爾士の没後、家族はどのように彼女を称揚し、彼女の作品はどのように流通していったのかについて注目したい。彼女が亡くなった年の冬、錢儀吉は長男宝恵の名義で『聴松楼遺稿』を刊行し、金孝維（1752～1849）、王照円（1763～1851）、董祐誠（1791～1823）にそれぞれ序文を依頼した。金孝維は錢儀吉の伯母で、序文に「今保恵が遺稿を収集し、予に序を請う」と記しているが、宝恵による編集作業が錢儀吉の指示のもとで行われたことは疑いない。孝子による母親の遺稿の編集刊行は、母の教えの遵守を意味したのに加え、一種の親孝行とみなされた。王照円は錢福胙と同年齢で、夫の郝懿行と共に長年にわたって北京に滞在し、訓詁に長じ、文学に精通し、当時の学界で高く評価されていた女性学者である⁽¹¹⁰⁾。錢儀吉は郝懿行と交流を持っていたため⁽¹¹¹⁾、王照円への序文執筆依頼は妥当な選択であったといえる。また、この人選からは、錢儀吉が陳爾士を詩人よりもむしろ学者に位置付けようとしたことがうかがえる。董祐誠は駢文の名家であり、暦算に長じ、錢儀吉に高く評価されていた⁽¹¹²⁾。

清代閩秀の詩文集においては、著名な学者による詩や序文が、しばしば著者自身の本文の文章量を超えることがあった。『聴松楼遺稿』（総七十六葉）は構成が簡素で、女性親族・学界における女性の先輩・北京の文学者の序文（四葉）のほか、錢儀吉の悼亡詩（五題十首、二葉）のみを付録として収めている。錢氏一族内で詩文に優れた女性は少なくなかったが、刊行され世に伝わった作品はごくわずかである。その上、このような短い時間内で出版されたのは、女性の作品を世に残すことに躊躇する傾向のある世風のなかで、比較的珍しいことだといえる。かりに錢儀吉が亡き妻の文稿を出版することを通じて文学世家としての名声を高めようとしたのだとしても、陳爾士に対する強い感情が刊行出版の前提となっていることは疑いない。加えて、錢儀吉はそもそも先祖や家族の文章を後世に残すことを強く意識していた⁽¹¹³⁾。運が良かったともいえるが、もし出版が少しでも遅れていれば、錢儀吉が罷免され北京を離れ、各地を転々とした時期になり、陳爾士遺著の出版はより実現が難しくなっていただろう。

『聴松楼遺稿』が上梓された後、錢儀吉はこの書を親戚や職場同僚などに多く送った。彼は日記に「石士が『聴松稿』三冊を求めた。昨日朱大兄が一冊を取った」（道光元年十一月十八日）、「『聴松稿』二冊を達大兄林に贈り、一冊を周輯齋学光に贈った」（同十一月二十日）と記している⁽¹¹⁴⁾。石士は陳用光（1768～1835）のことで、嘉慶六年に及第した進士、礼部侍郎を務めた⁽¹¹⁵⁾。朱大兄は朱能作のことで、嘉慶二十二年（1817）に賜進士二甲となった。達大兄林は戸部堂官首席の達林のことで、周学光は嘉慶二十五年（1820）

に及第した進士であり、戸部主事を務めた。錢儀吉は「妻陳恭人述略」に次のように語った。

彼女が亡くなった後、私は彼女の詩および雑文や随筆などを刪定し、『聽松楼遺稿』四卷として、これを上梓した。黄尚書左田先生、陳碩士侍郎、卿滋圃学士はこれを見て、しばしば人に贈るために私にこの本を求めた。婦女の教育に有益なものだと言った。

つまり、黄鉞（1750～1841、字は左軍、戸部尚書）、陳用光（1768～1835、嘉慶六年に及第した進士）、卿祖蔭など、錢儀吉の北京の職場同僚は『聽松楼遺稿』を婦女教育に有益な書籍とみなし、錢儀吉にこの本を求めたことがある。

道光二年（1822）、錢儀吉と長年親交があった張澍（1781～1847）は、『聽松楼遺稿』卷三第14通の手紙に記された「最近に介侯の消息がない」を読み、「衍石が常に私のことを思っているのを知り、これのために呆然としている」と感激した⁽¹¹⁶⁾。

子女にとって、陳爾士の遺著は重要な精神的遺産ともいえるものであった。道光十五年（1835）春、錢宝恵とともに北京に移り住んだ李介祉は満洲人の女性詞人顧太清（1799～1877）と知り合い、『聽松楼遺稿』を錢氏一族が伝統的に文学に秀でていたことの象徴として贈った。その後、李介祉は顧太清を中心とする北京の女性文学サロンに入り、詩詞の唱和などの活動に参加した⁽¹¹⁷⁾。道光十七年の冬、李介祉は宝恵とともに開封に戻り、顧太清は送別詞を贈った⁽¹¹⁸⁾。その後、二人は書簡を多く交わしたようである。道光二十年の春、錢儀吉は誕生日を迎えた際に、唐代詩人元稹の「生春詩」の韻を使い、三十首の詩を作った。その後、子女、側室を含む家族全員が皆唱和の詩を作った。錢儀吉はこれらの詩を『庚子生春詩』（上下二卷、道光二十年刊）にまとめて刊行した⁽¹¹⁹⁾。李介祉は『庚子生春詩』を顧太清に送り、太清は唱和の詩を十首作った⁽¹²⁰⁾。李介祉は第二首の唱和詩に「右は少姑（夫の庶母）の琴谿主人のために書いた。最近彼女はまもなく先恭人の著した『歴代后妃表』を補注する作業を完成する」という詩註をつけた。陳爾士が亡くなってからほぼ二十年が経っていたが、家庭の女性成員は依然として彼女の史料編纂の志を引き継いでいたことがわかる。陳爾士が亡くなった時にまだ幼児だった「四小小」の叔琬は、詩に嫡母を偲び、「先妣の『聽松楼稿』が芸林において称賛されている」という詩註をつけた⁽¹²¹⁾。陳爾士が残した作品は、子女に非常に重んじられ、特に女性成員にとって模範となった。

道光十五年（1835）以降、呉振棫は『国朝杭郡詩統輯』を編纂し、その中で陳爾士の条

目を収録し、「典釵」「輯歴代后妃表成詩以落之」「湛華老人画水仙」という三首の詩を収録し、「焯卿は博学であり、経義に通じ、『歴代后妃表』や『清異三録』を著したことがある。家を治めるには規則があり、親戚は皆、彼女の礼法を称賛する」と評価した⁽¹²²⁾。後日、潘衍桐（1841～1899）は『両浙輜軒統録』を編纂する際に、陳爾士の条目を採録し、呉振棫の評価を引用した。

道光二十六年（1846）頃、杭州の女性作家沈善宝（1808～1862）が『名媛詩話』の初稿を完成させ、明末清初から道光期の女性作家の著述に関して論評を加えた。本書は陳爾士を次のように高く評価する。

私は、従来の閩媛で儒学の經典に精通する者が甚だ少ないことに鑑み、ましてや経文の旨を詳しく解き明かし、すらすらと数万字を書き、婉曲に解釈して比喩し、古を援引し今を誡め、後学に恩恵を与えることが少なくない、誠に一代の女性の宗師である⁽¹²³⁾。

『国朝杭郡詩統輯』『名媛詩話』などの評価は清代閩秀文学史上における陳爾士の地位を確定させ、後世の論者によく引用された。

ところが錢儀吉は亡妻の遺著が広く流布することに対し、複雑な思いを抱いた。道光十八年、彼は従弟泰吉宛の手紙に次のような意見を書いた。

『聴松樓稿』を一冊差し上げる。中にはまた誤りがあるが、修正されていないため、（この本を）広く流布することを望んでいない⁽¹²⁴⁾。

では、「誤り」とは一体何を指しているのか。錢儀吉が道光元年十一月十八日の日記に述べている「沈表兄云、固廬公誥封中憲大夫、非贈也」はその手がかりを提示している⁽¹²⁵⁾。『聴松樓遺稿』卷二「述訓」で錢泰吉の母について「康熙甲午拳人贈中憲大夫諱柱臣女」と記している。「沈表兄」とは沈銘（1780～1850）のことで、おそらく『聴松樓遺稿』も読んでいた。しかし、『竹溪沈氏家乗』の記載によれば、沈柱臣は生前、誥封奉政大夫であり、死後に中憲大夫を贈られた⁽¹²⁶⁾。つまり、沈柱臣の追贈について、錢儀吉は沈銘の意見を聞いて、陳爾士の記載が間違っていると誤解した。しかし、『家乗』の記録によれば、陳爾士の記載は間違っていない。陳爾士による「述訓」の執筆動機は子女に錢氏一家の女性先人の事蹟や品格を教えて覚えさせるためである。陳爾士は、女性先人に対して非常に真摯な態度を以て本文を執筆した⁽¹²⁷⁾。一方、錢儀吉が長年にわたって家族史

の蒐集や世系の考証に力を尽くしており⁽¹²⁸⁾、こうした意識が陳爾士に影響を与えたことは容易に推測できる。銭氏一族の一員として、女性先人の伝記を書くことは、当然銭儀吉からも支持された。戚太夫人が亡くなった後、本来ならば銭儀吉が記念文を執筆するのが最も適切なことであり、陳爾士も家書に「太恭人の行述はいつ完成できるのか」（第二十通）と尋ねたことがある。しかし、最終的に戚太夫人の記念文は「先姑述略」の名で陳爾士によって書き上げられた。上海図書館蔵の銭儀吉の雑記には、「戚太恭人行状稿」二篇があり、いずれも未完成であるが、陳爾士の「先姑述略」はこの二篇の草稿を大いに参考している。

銭儀吉は亡き妻の遺著の流布に躊躇があったが、『聴松楼遺稿』は多くの人に読まれた。天津図書館蔵咸豊四年（1854）始言堂刻沈濂『蓮溪吟稿』の封面つまり表紙の右端には

咸豊丙辰六年（1856）三月中旬十二日、三哥手賜、並『聴松楼遺稿』
『采真子衡論』各一冊、十四日灯下善貽手識。

と二行の墨書識語が書かれる（図4）。巻首に「善貽/印信」（白）、「誦伝」（朱）の印がある。『柞谿沈氏世系宗譜』（咸豊五年〔1855〕思源堂刊本）によると、沈宝禾の第三子の名は善貽、字は翼餘、号は誦伝である⁽¹²⁹⁾。すなわち、本書は沈善貽の旧蔵であり、「三哥」とはおそらく同族の親戚のことを指す。この短い識語は、陳爾士の遺著が長年にわたり親族間で読まれていた証左に間違いない。

咸豊六年（1856）刊陸以活（1802～1865）『冷廬雜識』には、陳爾士に関する筆記（二点）を収録している。陳爾士の詩文を「其の言葉は習俗の弊害を突いている」、「命意は最も高い」と高く評価した⁽¹³⁰⁾。『冷廬雜識』は広く読まれていた筆記であるため、『聴松楼遺稿』の読者は、家族という枠内を超えていることがわかる。

咸豊八年（1858）八月十四日、山西太原にいた黄彭年（1823～1890）が『聴松楼遺稿』を閲覽し、『聴松楼遺稿』と『錢枵硃卷履歴』から抜粋した内容を日記に詳しく記録した⁽¹³¹⁾。黄彭年が本書を手に入れた経緯は不明であるが、当時山西省の書肆には、太平天国軍が江南地域に侵攻した後に流出した書籍や書画が多くあったといわれる。また、咸豊年間に宝恵の長男である錢枵が山西省夏県に任官していたことがあるため⁽¹³²⁾、『聴松楼遺稿』が山西に持ち込まれた可能性も十分に考えられる。黄彭年が陳爾士のことを「婦女集は詩詞を尊ぶものが多いが、爾士だけが経学に潜心している」と高く評価した理由は、乾嘉以降、最も評価された学問は経学であり、女性知識人の創作はほとんど詩詞吟詠の枠内に留まり、経学研究は専ら男性知識人に独占されていたからである。

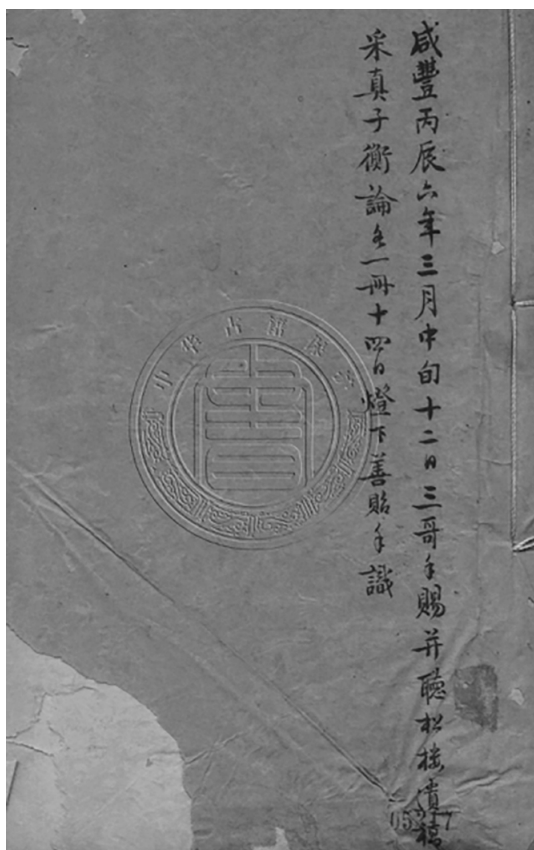


図4 天津図書館蔵咸豐四年（1854）始言堂刻本沈濂『蓮溪吟稿』の封面墨書識語

以上のように、清代後期、陳爾士の事跡や詩文が各種の地方志や地方文献彙編に収録され、家庭や地域（浙江・北京）の垣根を超えて広く読まれていた。太平天国の乱などによって、江南地域の書物や版木が多く焼かれてしまったが、『聽松樓遺稿』は清末民国期に依然として流通していた。以下、いくつかの例を挙げてみたい。

まず、光緒十五年（1889）二月十一日、葉昌熾は日記に「夜に『聽松樓遺稿』を読んだ。餘杭の女士、陳爾氏焯卿が著したものであり、易安（李清照）には及ばないが、汪無非や王照円と伯仲する」と記した⁽¹³³⁾。汪無非とは梁端のことで、字は無非、錢塘の人、学者梁玉繩の孫娘、女性作家梁德繩の従孫娘、藏書家汪遠孫の妻で、『列女伝校注』を著した⁽¹³⁴⁾。

次に、光緒三十年（1904）二月七日、繆荃孫は日記に「徐積餘と話し、（彼は）『聽松樓遺稿』を借りて帰った」と書いた⁽¹³⁵⁾。徐積餘とは徐乃昌のことで、字は積餘、安徽南陵の人で、『小檀樂室彙刻閩秀詞』『小檀樂室閩秀詞鈔』などを編纂出版したことがある。

『小檀樂室閩秀詞鈔』巻十四には陳爾士の条目があり、彼女の詞十四首と、『名媛詩話』『杭州府志』『杭郡詩続輯』の評価が収録されている⁽¹³⁶⁾。

民国年間、女性知識人の単士釐（1858～1945）は『清閩秀芸文略』を編輯し、『聽松樓遺稿』を始めとする陳爾士の著書目録（五種）を収録した⁽¹³⁷⁾。周作人も『聽松樓遺稿』を所蔵し、従来の評論家がほとんど注目を集めていなかった巻三の「家書」を「質朴かつ真摯であり、最も著者の人柄を見ることができる」と高く評価した⁽¹³⁸⁾。周作人は「閩秀才媛」の枠組みを超え、女性の文章をより公平な評価枠組みに位置付けるべきだと主張し、性別によって文章の優劣を判断しないことこそ、本当の尊重だと述べた。1955年の秋、蔵書家黄裳は蘇州の書估から滂喜齋旧蔵の清人文集数十種を購入し、その中には『聽松樓遺稿』もあった。陳爾士を「金閩の俊彦、上手な文章を書けるうえ、経学についても論じることができる。彼女が夫に送った家書は、婉曲で感情を尽くし、まさに散文の佳作である」と評価した。また、従来女性作家の作品は詩詞を主とし、まれに伝記や雑記もあるが、文集は非常に少ないため、『聽松樓遺稿』の価値は特に重視すべきだと指摘した⁽¹³⁹⁾。黄裳の陳爾士に対する評価は「閩秀文学」の枠組みを超えていないが、散文鑑賞の視点から彼女の家書を評価する点では周作人の評価と一致する。

以上のように、家族成員の間の閲読や称揚、そして地方志や女性詩文集の編纂を通して、陳爾士の事蹟や詩文は彼女の死後に伝わる機会を得て、幸いにも湮滅を免れた。

おわりに

本稿では、陳爾士を中心として清代女性知識人の生き方を検討し、陳爾士の作品が閲読・流通・記憶されていった過程を明らかにした。また、従来家譜や族譜に記載されていない女性成員の情報を補完したことを通して、錢氏一家の婚姻ネットワークの全貌を明らかにした。錢氏一家の文学や史学の伝統は、単に男性の家庭成員によって継承されたばかりでなく、女性の家庭成員にも引き継がれ、錢氏以外の家庭にも影響を与えた。

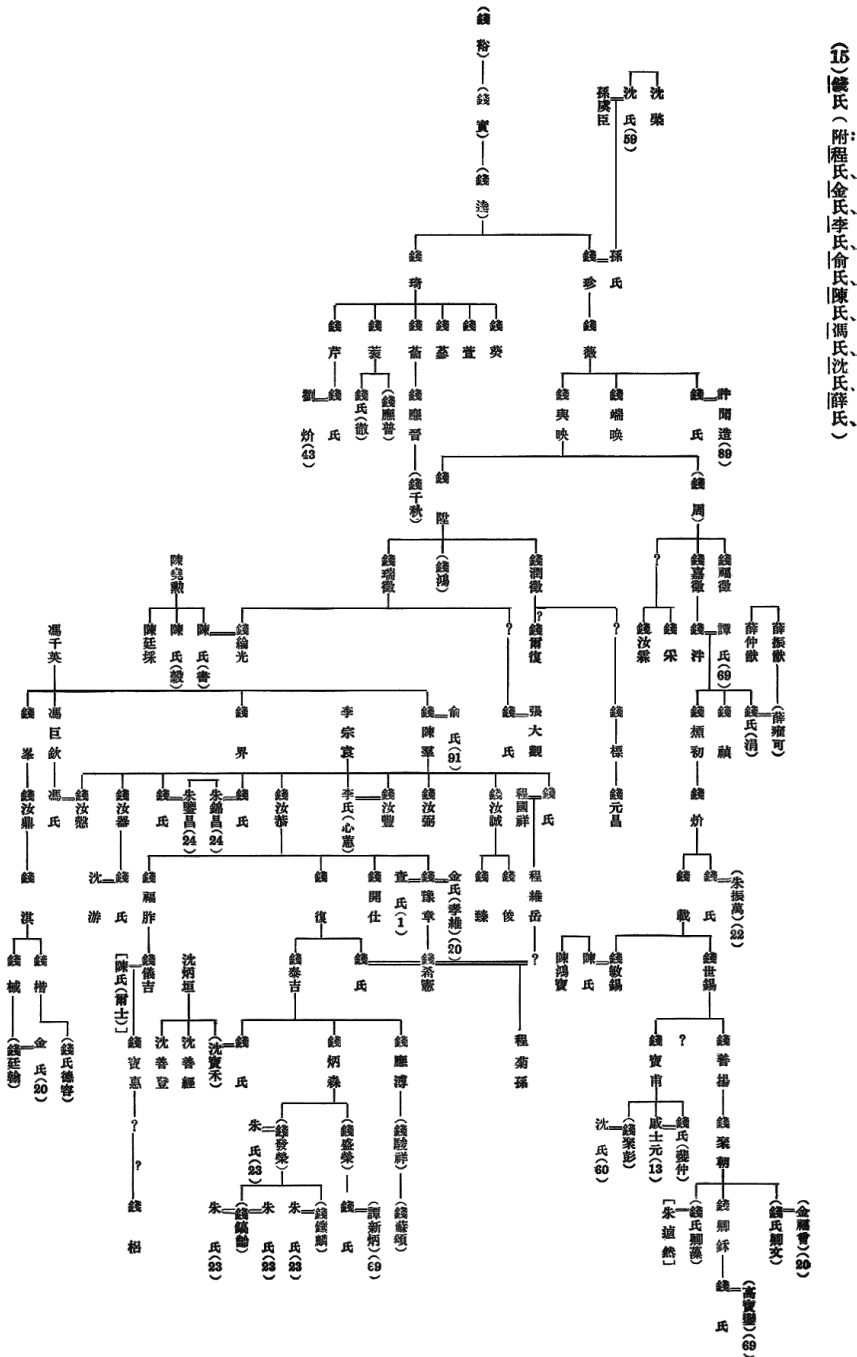
陳爾士は裕福な郷紳の家に生まれたが、詩文を好んだ父兄が捐納を通して官職を得たため、錢氏一族のような読書人の家柄とは言えない。しかし、彼女は錢儀吉との婚約によって、幼少期より私塾で教育を受ける機会を得た。錢儀吉は嘉興望族の出身であるが、父の早逝などの要因により、家庭は非常に困窮していた。錢儀吉は科挙試験の最難関を早くに突破したが、京官生活は必ずしも順調ではなかったため、陳爾士が時折生活費を工面する必要があった。陳爾士は子女の夭折をしばしば経験したため、その後次第に中医学の知識を身につけ、儀吉の側室の子女の養育に心血を注ぎ、いわゆる嫡母として愛を与え責任を

果たした。銭家の存続のためには子孫に教育を施す必要があり、陳爾士がその啓蒙教育を担当した。一方、陳爾士は決して主体性を喪失した犠牲者ではない。実兄の科挙合格の見通しが立たないことを確認した後、彼女は孝道の名義をもって兄を制約し、兄に高齢の母に孝養を尽くすようとし、実兄の出仕に断固反対した。このことより、彼女は結婚した後も、生家において大きな発言権を持っていたことがわかる。

そして、姑が北京で亡くなった後、陳爾士は側室らと子女を率いて北京の寓所を守り、母の葬式のために帰郷した夫と頻繁に書簡を交わした。彼女は家書に家庭成員の近況や家計収支、銭氏の親族や銭儀吉の職場同僚とのやりとりなどを詳しく報告した。さらに、邸鈔に記載された官界の近事も伝え、事態の推移を的確に予測した。運命共同体とも言える銭儀吉のために、陳爾士は家庭という舞台裏で知恵をしまり、心血を注いだ。

陳爾士が亡くなった後、銭儀吉は何度も幼児の夭折を経験した。新しく生まれた幼児の中で、順調に成長したのは三男と四男のみである。一方、家書に記録されている子女たちは、皆無事に成年を迎えた。彼女は早く亡くなったが、子女たちに深い影響を与えた。彼女の遺著は、家庭成員が社交する際に貴重な贈り物とみなされた。

銭儀吉は史料蒐集に高い意識を持ち、とくに銭氏一族関係の資料の蒐集に最も尽力した。それに加えて、銭儀吉は陳爾士に対して深い感情を持っていたため、陳爾士の詩文集の出版は早々に実現した。『聴松楼遺稿』に収められた家書は従来の女性詩文集にあまり見られない珍しいものである。しかし、伝統中国の知識人女性が書いた手紙がもともと少なかったのではなく、これらの手紙に出版や伝存の機会が与えられなかっただけである。陳爾士の女性親族を例にすると、金孝維・銭慶韶・李介祉・銭遠蒼らはみな家書を頻繁に書いたが、全く残されていない。金孝維は百歳近い長寿を保ち、銭氏の一家の長として親族と多くの手紙を交わしたが、世に残されたのはただ詩集一巻のみである⁽¹⁴⁰⁾。よって、清代中後期の女性知識人が残した資料の一つとして、『聴松楼遺稿』が持つ重要な意味を改めて理解する必要がある。近年、清末から民国期にかけての政治史や学術史分野において、男性官僚や知識人の残した書簡や日記を利用する研究が盛んに行われている。女性が残した資料の規模は確かに大きくはないが、女性史分野の資料の発掘と再発見にはまだ大きな余地があると考えられる。陳爾士のような個々の例を通して、解像度がより高い女性史像を追求することを今後の課題としたい。



(15) 錢氏 (附: 陳氏、金氏、李氏、俞氏、陳氏、馮氏、沈氏、薛氏、)

付録1 潘光旦『明清兩代嘉興的望族』「錢氏」商務印書館、中山文化教育館研究叢刊、1947年、24-25頁に挟まれた折り込み頁

註

- (1) ドロシー・コウ (Dorothy Ko、高彦頤) 著、李志生訳『閨塾師：明末清初江南の才女文化』(原書：Dorothy Ko, *Teachers of the Inner Chambers: Women and Culture in Seventeenth-Century China*, Redwood City, Ca: Stanford university press, 1995) 南京：江蘇人民出版社、2005年、8-11頁。
- (2) 「明清婦女著作」デジタルライブラリー：<https://digital.library.mcgill.ca/mingqing/>。方秀潔「緒論——文本中有什麼？婦女文集の重新発見と重新審視」を参照、方秀潔・エレン・ウイドマー (Ellen Widmer、魏愛蓮) 編『跨越閨門：明清女性作家論』(原書：Edited by Grace S. Fong and Ellen Widmer, *The Inner Quarters and Beyond: Women Writers from Ming Through Qing*, Leiden: Brill, 2010) 北京：北京大学出版社、2014年、6-7頁。
- (3) スーザン・マン (Susan Mann、曼素恩) 著、羅曉翔訳『張門才女』(原書：Susan Mann, *The Talented Women of the Zhang Family*, Oakland, CA: University of California Press, 2007) 北京：北京大学出版社、2015年、174-177頁。最近、日本語訳も出版されている。スーザン・マン著、五味知子・梁雯訳『張家の才女たち』京都：東方書店、2024年。
- (4) 方秀潔著、周睿・陳昉昊訳『卿本著者：明清女性的性別身份、能動主体和文学書写』(原書：Grace S. Fong, *Herself an Author: Gender, Agency, Writing in Late Imperial China*, Honolulu: University of Hawaii Press, 2008) 南京：江蘇人民出版社、2024年、2・18頁。
- (5) 中国における日記文献の研究状況については、張劍『晚清日記中の世情、人物と文学』(南京：鳳凰出版社、2022年)を参照。
- (6) 張秀玉「中国古代女性有詩無文之異況及成因」『深圳大学学报 (人文社会科学版)』2021年第4期。
- (7) 近代以前の女性の日記は数が非常に少なく、知られているものとしては、わずかに明の王鳳嫻『東帰記事』、明末清初の邢慈静『追述黔塗略』、清末の単士釐『癸卯旅行記』の三種が挙げられるのみである。近年、宗婉 (1810～1833)、馮婉琳 (1848～1914)、楊秀清 (1859～1921)、馬延淑 (1887～1906)、楊競詩 (1893～1935) の五人の日記が整理され出版された。『近代女性日記五種 (外一種)』南京：鳳凰出版社、2021年。
- (8) 『上海図書館蔵盛宣懷檔案萃編』(下)に盛宣懷の妻張氏による息子宛の書信、盛宣懷の妻莊德華による盛宣懷宛の書信を収録し(頁470・481・498、頁528-529)、『許宝衡蔵札』下巻に許之定の妻楊玉湘、許宝名の妻方月画の家書をそれぞれ一通収録し(中華書局、2013年、頁595-601、頁668-670)、『湖南図書館蔵近現代名人手札』(五)に曾広珊による郭筠宛の家書を一通収録する(長沙：岳麓書社、2010年、3086-3088頁)。いずれも家庭の雑多な内容にかかわり、往時の女性の日常生活を考察する上で非常に貴重な資料である。
- (9) 水鏡山房輯『歷朝名媛尺牘』清刻本、陳韶編『歷代名媛尺牘』同治十二年(1874)年刻本、榮文祚輯『名媛尺牘続集』中国国家図書館蔵鈔本、など。いずれもなまめかしい書簡が多く収録されているものである。また、男性が女性の名義で書いた偽作も少なくない。
- (10) 『聴松楼遺稿』の刊本は、中国国家図書館、上海図書館、中国科学院図書館、北京大学図書館、北京師範大学図書館、中山大学図書館、神戸市立中央図書館吉川文庫などに所蔵されている。北京師範大学図書館本の影印は、肖亜男主編『清代閨秀集叢刊』第27冊(北京：国家図書館出版社、2014年)に収録されている。胡曉明・彭国忠編『江南女性別集初編』(合肥：黄山書社、2008年)には整理本が収録されている。「明清婦女著作」デジタル

ライブラリーには中山大学図書館本の全文画像データが公開されている (<https://digital.library.mcgill.ca/page-turner-3/pageturner.php> [2024年6月30日に接続])。筆者が実物を確認したのは神戸市立中央図書館吉川文庫本(吉川幸次郎旧蔵、蔵書印「唐学斎」が押されている)のみである。また、吉川文庫本の巻頭には錢儀吉の「附詩」(二葉)があるが、中山大学図書館本と北京師範大学図書館本には収録されていない。そのため、本稿は吉川文庫本を利用して論を進めていく。

- (11) 唐新梅「内闈の焦慮——従陳爾士家書看嘉慶末年士族家政」『清代文学研究集刊』第六輯、2013年。
- (12) 潘光旦「明清兩代嘉興的望族」『潘光旦文集』第3卷、北京：北京大学出版社、1995年、259頁。龔肇智『嘉興明清望族疏証』(上卷)「秀水錢氏」北京：方志出版社、2011年、167-168頁。徐雁平『清代世家与文学传承』北京：生活・読書・新知三聯書店、2012年、53-56頁。凌冬梅『浙江女性蔵書』杭州：浙江工商大学出版社、2015年、221-222頁。
- (13) 劉詠聰「清代女性課子書挙要」『東海中文学報』第20期、2008年7月。
- (14) 乾隆三十九年(1774)、金川での軍事行動を支える軍事費を調達するために、大規模に実施された捐納の事例は「川運事例」という。伍躍『中国の捐納制度と社会』京都大学学術出版会、2011年、273頁。
- (15) 錢儀吉「送外舅故刑部直隸司員外郎陳公葬」の詩註を参照。「初頤園、秦曉峴兩先生皆公素交。」『北郭集』卷二、中国国家図書館蔵鈔本『衍石齋集』に収録、葉3b。
- (16) 錢儀吉「亡妻所居黃回山中、風物清曠、而松竹尤美。留京師十餘年、每暇語、未嘗不及之也。今已矣。妻兄友石属岱雨写其意、当升屋之復、而予系之三詩、時辛巳(1821)六月二十二日」の詩註を参照。「外姑蔡恭人今年七十三矣。」『定廬集』卷二、中国国家図書館蔵鈔本『衍石齋詩集』に収録、葉1a。
- (17) 張吉安主修『餘杭県志』上海聚珍仿宋印書局、1919年嘉慶戊辰重修本による重印本、卷首「纂修氏名」葉2b、卷二十八「義行伝」葉13b-16a。
- (18) 錢儀吉撰、錢駿祥統輯『廬江錢氏年譜統編』(山西省社会科学院蔵清末排印本、ユタ系図協会〔FamilySearch〕撮影)卷三、葉42b-43a。
- (19) 上海図書館蔵「衍石齋手蹟雜記(上)」稿本には錢儀吉の「戚太恭人行状稿」があり、「太恭人姓戚氏、諱」と「字」の下にそれぞれ「芷生」(白文)と「応仙」(朱文)の印が押されており、戚氏の名は芷生、字は応仙であることがわかる。
- (20) 錢儀吉「述旧三首上餘齋先生」題記、錢儀吉『澄觀集』卷二、中国国家図書館蔵鈔本『衍石齋詩集』に収録、葉19b。「儀吉生四歳、先大夫与計偕京師、家無一椽。母乃挈之依舅家、以養以教八年、乃從宦北来也。」錢儀吉「洙涇橋墓堂右壁刻辞」錢儀吉『衍石齋記事稿』卷九、中国国家図書館蔵光緒六年(1880)重刊本、葉37b・40a。
- (21) 許嘉猷編『許順庵老人自述年譜』中国国家図書館蔵道光間刻本、葉5a。「嘉興錢雲巖、諱福胙、贅於德清咸亨園朝桂大令宅。」
- (22) スーザン・マンは、清代常州において、婿入り婚が士人階級に広く受け入れられた結婚様式であることを指摘している。前掲『張門才女』、43頁。
- (23) 錢儀吉「妻陳恭人述略」錢儀吉『衍石齋記事統稿』卷八、中国国家図書館蔵光緒六年(1880)重刊本、葉40a。「公謂戚公曰、為錢氏婦、必讀書、兩三年間、当令就塾也。已而偕兩兄從其舅蔡翁讀書。」
- (24) 本書巻末に収録されている陳紹翔の跋文は以下の通りである。「予就塾年、即聞父兄師

長道及此書大有裨於經生制芸。其講解明晰、雖童蒙無不通曉。惜鏤板遠在螺江・劍浦間、霞嶺以外不概有也。予時耳食斯語、心竊誌之不忘。厥後每至武林、於書肆遍訪之、卒不獲一遇。間探得儲藏家箱篋具有此書、又珍奉為枕中祕、吝不肯借。予購求之思亦漸淡乃已。己酉（1789）秋、忽菰城估客以全冊見售、予得之、不禁為之稱快。」この記載より、陳紹翔の読書や出版の趣味の一端がうかがえる。蘇浚『易經見說』天津図書館蔵乾隆五十五年（1790）師檢堂活字印本。

- (25) 前掲『聽松樓遺稿』卷四、葉1ab。
- (26) 錢福祚は嘉慶七年三月晦日に病没した（前掲「洙涇橋墓堂右壁刻辭」）。錢儀吉の「妻陳恭人述略」には「恭人來婦數月、先考卒、執喪盡哀事」と記されているため、陳爾士が嫁いできたのは嘉慶六年の秋冬の頃だと推定される。陳爾士が「聽松樓女訓序」に「予自辛酉冬歸錢氏、未逾四月、先舅棄世。」（前掲『聽松樓遺稿』卷二、葉1a）と書いていることから、彼女が嫁いできたのは嘉慶六年十二月だと推算できる。
- (27) 前掲「洙涇橋墓堂右壁刻辭」葉38a。
- (28) 前掲「聽松樓女訓序」。
- (29) 錢儀吉「四月十六日出都車中口号」前掲『北郭集』卷二、葉9a。
- (30) 錢儀吉「小女子瘞輒銘」前掲『衍石齋記事稿』卷十、葉36a。
- (31) 前掲「妻陳恭人述略」葉41a。
- (32) 前掲『廬江錢氏年譜統編』卷四、葉27b。
- (33) 張仲礼著、李栄昌訳『中国紳士：關於其在19世紀中国社会中作用的研究』上海：上海社会科学出版社、1991年、133-134頁。
- (34) 前掲「妻陳恭人述略」葉42a。
- (35) 錢儀吉「蘇雨齋記」『颺山樓初集』卷四、中国国家図書館蔵鈔本。
- (36) 前掲『聽松樓遺稿』卷四、葉6ab。
- (37) 張徳昌『清季一個京官的生活』香港：香港中文大学出版社、1970年、46-57頁。
- (38) 陳爾士「聽松樓女訓序」を参照。前掲『聽松樓遺稿』卷二、葉1a。「辛未、姑伝内政。」
- (39) 錢儀吉「戲題市買簿」前掲『澄觀集』卷四、葉18ab。「貧家乏經營、所用蓋有限。条列為一書、日必一半版。平生爛治生、經歲不掛眼。吾妻職思憂、灯前熟開展。偶然值窺覘、大旨一笑莞。豕魚前提行、蔬藪後分件。間市鷄鴨奢、亦用羊雉羶。冬煤夏須冰、車膏馬有稗。皂櫪若屨篋、缸盆及巾笮。米塩雜天官、醯醬備周典。其日多陳因、其徧率杜撰。大綱在準繩、小弊毋詰辨。求利情所恆、臨民道宜簡。水清魚則無、林焚鳥盡散。君思義經交、下益上乃損。鉤距失人和、吏廉不降戩。矧予奉慈親、兒齒祝善飯。萃歛同室心、此是万金産。吾妻然吾言、啓篋愁無鈔。走盤落子声、亦欲稍節撙。感子用意勤、願子常日勉。会看此賬簿、日積至無算。塞破一屋子、我汝長遊行。」
- (40) 沈曾植「記先太夫人手書日用帳冊」錢仲聯輯録「沈曾植海日樓鈔佚跋（六）」『文献』1992年第4期。
- (41) 前掲『聽松樓遺稿』卷四「附録夫姊文琴女史慶韶作」（卷四葉3b-4a）によると、錢儀吉の姉の名前は慶韶、号は文琴女史である。前掲『聽松樓遺稿』卷二「先姑述略」の「吾夫四歳、夫姊八歳」（卷二葉12b）の記載により、錢慶韶は乾隆四十四年に生まれたことがわかる。

前掲錢儀吉『澄觀集』卷五「四月二十三日奠姊述哀四十韻」（葉12ab）に見える「聰明慈厚宜可寿、乃不寿者緣多男。多男多夭益傷瘁、譬如老桑葉落全供蠶」の記載によると、錢

- 慶韶は出産によって死亡し、子供も多く夭折したとある。
- (42) 前掲『聴松楼遺稿』卷二、葉1b。
- (43) 金孝維「敘」前掲『聴松楼遺稿』卷首。
- (44) 尹鈞科等著『北京歴史自然災害研究』北京：中国環境科学出版社、1997年、374頁。鄧鉄濤編『中国防疫史』桂林：広西科学技術出版社、2006年、138頁。
- (45) 錢儀吉「七月二十日書感」の詩注「十六日移柩於長椿寺後寮」を参照。前掲『定廬集』卷二、葉1b。
- (46) 錢儀吉「陳恭人附身各件」上海図書館蔵稿本『衍石先生手跡雜記』（上）。
- (47) 錢儀吉「重有感」を参照。「還山旧約話分明、明日投床頓隔生。晚檻一辞揮扇影、曉窗無復授書声。悽迷百念將誰語、浩蕩中年默自驚。役役塵蹤還未了、累君旅殯太無情。」首句の下に「五月二十四日夜」という注釈がある。前掲『定廬集』卷二、葉2ab。
- (48) 中国国家図書館蔵鈔本『衍石先生致弟書存稿』第二十一通、拙稿「中国国家図書館蔵錢儀吉致錢泰吉書札箋積」（『中国典籍与文化論叢』第26輯、2022年9月）を参照。任群は『錢儀吉日記書札輯存（外二種）』（中国近現代稀見史料叢刊第九輯、南京：鳳凰出版社、2022年10月）に『衍石先生致弟書存稿』の整理本をも収録したが、人名などの点について考証を加えなかった。
- (49) 前掲「中国国家図書館蔵錢儀吉致錢泰吉書札箋積」第五十通。
- (50) 錢儀吉「半衾歎」前掲『定廬集』卷六、葉19b。
- (51) 便宜上、家書に通し番号を付けた。明清時代には、手紙の発送中に紛失や到着日の遅れが頻発したため、家書に通し番号を付けることが一般的であった。堯育飛「日記所見清人書信的編号問題」（澎湃新聞・私家歴史2021年7月6日、https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_12900601、2024年11月9日に接続）を参照。本来、陳爾士家書に番号が付けられていた可能性もあるが、整理・出版の過程で錢儀吉によって削除されたとも考えられる。この点については、伍躍氏よりご教示を賜った。
- (52) 前掲金孝維「敘」。
- (53) 前掲錢儀吉「妻陳恭人述略」。「兒女輩尽從恭人授書。恭人嘗課宝恵、写『春秋左氏』五十凡一篇、間点定所謂策論。予還京師、見之、知恭人善教、大慰。」
- (54) 上海図書館蔵稿本『衍石齋隨筆』（下）。前掲『錢儀吉日記書札輯存（外二種）』（37頁）も参照できるが、文字の判読に若干の誤りがある。
- (55) 錢儀吉「子寿同居記」前掲『衍石齋記事統稿』卷一、葉18b-19a。
- (56) 錢儀吉嘉慶十九年五月十四日の日記、前掲『錢儀吉日記書札輯存（外二種）』8頁。
- (57) 郭協寅「金誠齋先生伝」繆荃孫輯『統碑伝集』卷四十、宣統二年（1911）、江楚編訳書局刊、葉26ab。
- (58) 前掲「中国国家図書館蔵錢儀吉致錢泰吉書札箋積」第二十五通。
- (59) ヘンリエッタ・ハリソン（Henrietta Harrison、沈艾娣）は『夢醒子』のなかで、劉大鵬の塾師生活に対する不満を精彩な筆致で描写している。沈艾娣（Henrietta Harrison）著、趙妍傑訳『夢醒子：一位華北郷居者の人生（1857-1942）』（原書：Henrietta Harrison, *The Man Awakened from Dreams: One Man's Life in a North China Village, 1857-1942*, Redwood City CA: Stanford University Press, 2005）北京：北京大学出版社、2013年、32-34頁。
- (60) 拙稿「清代中後期学者的課子経験与効果：以錢儀吉、錢泰吉為中心」（*Journal of International Studies*(8), June 2023, Faculty of International Studies, Kindai University）を参照。

- (61) 錢儀吉「簡潘吾亭水部二首」、前掲『衍石齋詩集』卷七、葉11a。「初逢早屏尋常語、一瞬俄然十六年。名第先予慙學步、歲行与爾笑同躔。」
- (62) 『聽松樓遺稿』卷末に見える錢宝恵の識語を参照。
- (63) 王筠『教童子法』、繆荃孫『雲自在龕叢書』第二集に収録、天津図書館蔵光緒年間刻本、葉1ab。
- (64) 前掲「子寿同居記」、葉18a。錢儀吉「除姊喪四首」に「春明更乏医」という一句から、彼が北京の医者 of 医術を信頼していなかったことがうかがえる。『澄觀集』卷六、葉10a、前掲『衍石齋詩集』に収録。
- (65) 黄宮繡著、王淑民校注『本草求真』卷一、北京：中国医薬出版社、1997年、9-11頁。
- (66) 陳爾士「先姑述略」前掲『聽松樓遺稿』卷二、葉12b-13a。
- (67) 前掲錢儀吉「洙涇橋墓堂右壁刻辭」葉40ab。
- (68) 伍躍「清代の報捐と印結」を参照、伍躍『中国的捐納制度与社会』第三章、京都：京都大学学術出版会、2011年、174頁。
- (69) 錢儀吉「重写哀四首」第一首、前掲『定廬集』卷二。
- (70) 『仁宗睿皇帝実録』卷三百四十二、嘉慶二十三年五月一日、二日、六日を参照。
- (71) 提塘について、殷晴「提塘からみた清朝中央と地方の情報伝達」(『東洋学報』第99巻第3号、2017年12月)を参照。
- (72) 錢儀吉「吉石汪先生墓表」前掲『衍石齋記事稿』卷九、葉27a-28b。
- (73) 查若筠『珮芬閣焚餘』道光十三年(1833)刻本、肖亞男『清代閩秀集叢刊統編』第15冊、国家図書館出版社、2018年。
- (74) 查克敏重編『海寧查氏族譜』卷四世次三集之十七、光緒三十三年(1907)刻本、ユタ系図協会(FamilySearch)撮影、葉24a。
- (75) 前掲查若筠『珮芬閣焚餘』卷首潘恭常「題詞」を参照。
- (76) 錢儀吉「書潘工部事」『衍石齋記事稿』卷一、葉10b。
- (77) 錢儀吉「題葉兩坨大令維庚江亭登高回即送之官宝応」前掲『衍石齋詩集』卷四、葉5b。
- (78) 鄭揮、鄭了編『民信局与信客史料考略』寧波：寧波出版社、2019年、5-8頁。
- (79) 何汝霖道光二十九年閏四月初二日(1849年5月23日)日記を参照。張劍・鄭園整理『晚清軍機大臣日記五種』(上)『何汝霖日記』、中国近代人物日記叢書、北京：中華書局、2019年、121頁。「立夫覆札、云初十前後方能發折、則家信無處可寄、悶悶。擬由差局專遞、又須花廿餘金矣。思之不必。」これによって、折差を利用して書簡を送る場合、送料がかからない一方、民営の「差局」を利用する場合、高い送料を払う必要であったことがわかる。
- (80) 清代において、象牙は痔瘻を治療できる薬材とみなされた。葉天士「治痔漏方」(「新象牙屑二斤為末、每早用熟鷄子三個、将牙末和吃、或入稀粥内吃亦可、服尽一料自愈。」)を参照。華岫雲編『種福堂公選良方』卷二「公選良方」に収録、北京：人民衛生出版社、1960年、70頁。
- (81) 魏成憲『清愛堂集』(道光八年序刊本)卷首に附されている『仁庵自記年譜』(葉19a)を参照。嘉慶二十五年、魏成憲は錢儀吉とともに八旗地訟の調査を担当し、詩文をやりとりした。魏成憲『清愛堂集』卷二十一「即事二首次錢霽人農部儀吉韻」の下に「時清釐八旗地訟、与霽人共事斯役」という注釈がある(葉4b)。錢儀吉の原詩はすなわち「八旗現審處即事二首」であり、前掲『定廬集』卷一に見える。
- (82) 『清史稿』卷360、中華書局、1977年、11371-11374頁。

- (83) 『呉菘圃府君自訂年譜』を参照。『北京図書館蔵珍本年譜叢刊』第117冊、北京：北京図書館出版社、1999年、123-124頁、161頁。「(乾隆)三十年乙酉十九歳……十月、少宰公命往沐水就婚。夫人姓錢氏、為嘉興太傅文端公孫女、安徽安慶府同知蘄齋公諱汝恭女也。蘄齋公時官沐陽、令館余於官廡、命与公子漁莊豫章、漆林開仕同学。」錢儀吉の姑母は嘉慶十年十一月十八日に病没した。
- 嘉慶二十一年、錢儀吉は「姑父吳宮保菘圃先生七十賜寿詩」を書いた。中国国家図書館蔵鈔本『澄觀集』巻七。
- (84) 前掲『廬江錢氏年譜統編』巻四、葉38a。
- (85) 前掲『廬江錢氏年譜統編』巻五、葉16b-17a。
- (86) 前掲『餘杭県志』巻三、葉19b。
- (87) 近年、任群は古典文学の視点から錢儀吉の研究に尽力し、錢儀吉の家庭成員を考証し、彼らの詩を輯佚したが、錢儀吉の子女の年齢を詳しく考察していない。任群「錢儀吉家庭成員及其詩歌輯考」『中国詩学』第34輯、2022年12月。拙稿「錢儀吉的兒女們」(『古典文学知識』2023年3月)で錢儀吉の子女の年齢を考証したことがあるため、本稿ではその考証の過程を適宜省略する。
- (88) 蘇源生「書先師錢星湖先生事」閔爾昌輯『碑伝集補』巻十、燕京大学国学研究所排印本、1923年、葉9b-10a。
- (89) 徐世昌等編纂『清儒学案』巻143、中華書局、2008年、5601-5628頁。
- (90) 錢臻等修撰『(海塩)錢氏家譜』巻八、道光六年(1826)顯忠祠藏板、葉15a-16b。
- (91) 錢儀吉「硯貞榭曆誌銘」「硯貞別誌書磚」前掲『衍石齋記事稿』巻十、葉31a-32b。
- (92) 姚靚「清明追感十女之殤八絶句」(錢儀吉『刻楮集』巻四、葉2b-3a、前掲『衍石齋記事稿』に収録)、姚靚「生春用元微之韻十二首」(前掲『庚子生春詩』巻下、葉1a-3a)、「錢儀吉「觀姚靚画蠨三絶句」(前掲『定廬集』巻五、葉14b)、姚靚「立秋後二日次韻同作」(前掲『定廬集』巻六、葉16ab)を参照。
- (93) 錢儀吉『修省齋日録』九月五日、前掲『錢儀吉日記書札輯存(外二種)』25頁。
- (94) 陳爾士「論英兒」前掲『聽松樓遺稿』巻三、葉18ab。「新婦將從汝北行、遠別父母、依戀可知、汝須勸解之。舅家与母家無異、我与汝父自必諸事体諒之也。」
- (95) 錢儀吉「哭大兒宝惠五百三十字」『衍石齋晚年詩稿』巻五、民国刊本、葉11b。「一自汝母亡、力貧共閨媛。」
- (96) 『衍石齋記事稿』巻二に収められている「答程春廬書」(葉17a-21b)から、錢儀吉と程同文の友情がうかがえる。
- (97) 程同文「亡妻吳氏哀詞」、程同文『密齋文集』不分巻、頁数なし、天津図書館蔵。錢儀吉「題女史吳玖画三首」『澄觀集』巻三、葉10a、前掲『衍石齋詩集』に収録。
- (98) 前掲「国家図書館蔵錢儀吉致錢泰吉書札箋釈」第十一通。「京信又云筠麓催親甚急、春杪苞須入京。」(丙申〔1836〕元旦)錢儀吉「簡朱筠麓給諫鴻」、前掲『定廬集』巻三、葉18ab。朱根曾「生春用元微之韻六首」、前掲『庚子生春詩』巻下、葉8a-9a。
- (99) 前掲「清代中後期学者的課子經驗与効果：以錢儀吉、錢泰吉為中心」を参照。
- (100) 前掲「錢儀吉的兒女們」を参照。
- (101) 沈善登殊卷(同治七年会試科)を参照。顧廷竜主編『清代殊卷集成』第二十九冊、台北：成文出版社、83頁。「妣氏錢、誥贈恭人、乾隆丁卯科舉人安徽安慶府同知諱汝恭公曾孫女、乾隆庚戌科進士翰林院侍講學士諱福祚公孫女、嘉慶戊辰科進士翰林院庶吉士工科掌印

給事中諱儀吉公女、道光庚子科順天舉人揀選知縣諱宝惠公胞妹、国学生候選同知賞戴藍翎名尊煌、道光庚子科順天舉人甘肅龍德縣知縣名宝宣、附監生分發廣東從九品名彝甫公胞姊。著有『敦說齋臚稿』、未刊。」

- (102) 沈善登「沈吉石書」、錢儀吉纂・靳斯標點『碑伝集』(一)、北京：中華書局、1993年、7頁。「九年己丑(1829)、先府君述婚京邸、先母為言、方事之殷、四出借書、不得、則命駕廠肆、捆載滿收、至無容膝地、則跨轅而歸、衆手分鈔。伯舅助緝檢、尅日還之、易所未見、以為常。而先母所写最速且多、公賜詩有『兼旬為写百篇書』之句、即此事也。辛卯(1831)冬、先母南歸、家書往還。」
- (103) 前掲『衍石齋記事稿』卷三、葉37a。加えて葉景葵は錢儀吉『南朝会要』初稿四冊に跋文をつけ、「全書皆先生精楷手録、其非自録者、為其長子婦李介社・仲女遠苓・侍人姚靚分鈔、亦經先生校訂」の句がある。柳和城編著『葉景葵年譜長編』上海：上海交通大学出版社、2017年、956頁。『三国会要』『南朝会要』の稿本は現在上海図書館に所蔵されている。
- (104) 錢儀吉『刻楮集』卷三、葉3b-4a、前掲『衍石齋記事稿』に収録。
- (105) 前掲「国家図書館蔵錢儀吉致錢泰吉書札箋積」第二十一通。
- (106) 前掲『定廬集』卷六、葉17b-18a。「飛雨時一灑、蒼苔淨無塵。林蟬送殘暑、物候潔以新。從宦久京国、未解憶江濱。秋期天上近、柔意迫莫伸。炎涼互代謝、人事還相因。早雁雲際來、鷓声枕前陳。驪駒勿催唱、依依此昏晨。臨風感締綌、默祝天心仁。閔河日寄書、豈及定省親。」
- (107) 戚維高創修『餘姚戚氏宗譜』(惇倫堂藏版、光緒二十五年〔1899〕、中国社会科学院歴史研究所図書館蔵、ユタ系図協会〔FamilySearch〕撮影) 卷十五老三房璽三公支、葉30b-31a。
- (108) 史叔平の家系について、錢儀吉「李夫人家伝」(前掲『衍石齋記事稿』卷八、葉24a-25b)を参照。
- (109) 前掲「錢儀吉的兒女們」を参照。
- (110) 許維遜「郝蘭皋夫婦年譜 附著述考」『清華學報』第1期、1935年、185-233頁。
- (111) 嘉慶二十四年七月初五、胡培鞏らは京師万柳堂で鄭玄を祀り、錢儀吉・郝懿行などが同行。胡培鞏「漢北海鄭公生日祀於万柳堂記」『研六室文鈔』卷八、中国国家図書館蔵道光十七年(1837)涇川書院刊本、葉3ab。
- (112) 錢儀吉「哭董方立孝廉祐誠」前掲『定廬集』卷四、葉3ab。
- (113) 錢儀吉は数十年にわたり、錢泰吉と書簡を交わして家族史料の収集・考証・整理について議論し、先祖の逸文を集めて、先祖の文集や年譜を編纂した。錢儀吉「与四弟泰吉書四首」(前掲『衍石齋記事稿』卷二、葉32a-37b)、前掲「国家図書館蔵錢儀吉致錢泰吉書札箋積」第5・16・18・22・42・53・77・81・83・85通を参照。
- (114) 上海図書館蔵『衍石齋隨筆』不分卷上冊。
- (115) 錢儀吉「陳石士太乙舟消寒第三集余以病不克赴奉簡二絶句」陳石石編修出示桐城姚先生所遺高山流水硯、前掲『衍石齋詩集』卷六、葉14ab。
- (116) 張澍「読錢衍石儀吉農部配陳恭人聽松樓稿家書内有言及余消息者、知衍石之時念我也、為之惘然」天津図書館蔵『養素堂詩集』卷二十六『入都後集』上、道光二十二年(1842)刻本、葉11b-12a。
- (117) 顧太清「復用韻題聽松樓遺稿」四月廿二雲姜招同珊枝・素安・初蘭過崇効寺看牡丹、遇陸琇清・汪佩之。是日雲姜以摺扇囑写、歸來画折枝梅、遂書於扇頭「春日遊法源寺前後和錢侍郎韻詩五首、乃雲姜遂和詩至六首、初蘭和詩至七首、並又篆書七言長歌送來、余不

- 獲已、復次前韻三章答之」などを参照。顧太清撰、金啓孫・金適校箋『顧太清集校箋』巻二、北京：中華書局、2012年、110-113頁。
- (118) 顧太清「金縷曲・送初蘭妹往大梁」前掲『顧太清集校箋』巻十、591頁。
- (119) 『庚子生春詩』の刊本は、中国首都図書館、東京大学東洋文化研究所倉石文庫に所蔵されている。両者の写真版を確認した上で、版本の異同は全くなく、完全な同版であることがわかる。
- (120) 顧太清「初蘭寄到闔家共賦春生詩數十首且約同賦、遂用元微之原韻、僅成十章、詩以代簡」前掲『顧太清集校箋』巻五、243-355頁。
- (121) 『庚子生春詩』巻下、葉7a。
- (122) 『国朝杭郡詩統輯』巻四十二、ハーバード燕京図書館蔵、光緒二年（1876）刊、葉36a-38a。
- (123) 沈善宝『名媛詩話』巻五、譚勤整理『沈善宝集』杭州：浙江古籍出版社、2021年、477-479頁。
- (124) 前掲「国家図書館蔵錢儀吉致錢泰吉書札箋積」第四十三通。
- (125) 前掲『錢儀吉日記書札輯存（外二種）』66頁。
- (126) 『竹溪沈氏家乘』巻十二「譜牒下十三世」（道光九年〔1829〕重修）、ハーバード燕京図書館蔵、光緒十年（1884）編、葉20a。
- (127) 陳爾士「述訓」前掲『聽松樓遺稿』巻二、葉3b。「竊覽家乘、祖姑以上嘉言淑則、幸乃得聞、懼其久且墮遺也、謹輯而録之。族系年齒、一皆附載、原本於當時行狀与夫志銘伝記之文、非有拠依、不敢羸入、恐失真也。」
- (128) 于志嘉「異姓別籍或復姓婦宗：以廬江錢氏家族為例」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第八十五本第四分、2014年12月。
- (129) 『竹谿沈氏世系宗譜』巻下、咸豐五年（1855）思源堂刊、コロンビア大学中文図書館蔵、ユタ系図協会（FamilySearch）撮影、葉43b。
- (130) 陸以湉撰、崔凡芝点校『冷廬雜識』巻二、北京：中華書局、1984年、69-70頁。
- (131) 黄彭年著、樊長遠等整理『黄陶楼先生日記』（上）、南京：鳳凰出版社、2020年、292-293頁。
- (132) 前掲「清代中後期学者の課子経験与効果：以錢儀吉、錢泰吉为中心」を参照。
- (133) 葉昌熾『綠督廬日記抄』巻五、上海蟬隱廬石印、1933年、葉53a。
- (134) 劉向撰、梁端校注『烈女伝校読本』天津図書館蔵道光十四年（1834）振綺堂刻、同治十三年（1874）補刻本、巻首汪遠孫「識」、梁德繩「序」を参照。
- (135) 繆荃孫『甲辰日記』（1904）、繆荃孫著、張廷銀・朱玉麒主編『繆荃孫全集・日記①』南京：鳳凰出版社、2014年、274頁。
- (136) 徐乃昌編『小檀樂室彙刻閩秀詞』附『閩秀詞鈔』巻十四、ハーバード燕京図書館蔵光緒二十一年至宣統元年刻本（1895-1909）、葉5a-7b。
- (137) 单士釐編『清閩秀芸文志』京都大学人文科学研究所図書館蔵手稿本、第一冊。
- (138) 周作人「女人的文章」、鍾叔河『周作人文類編』5、長沙：湖南文芸出版社、1998年、402-403頁。
- (139) 黄裳「聽松樓遺稿」『來燕榭書跋』上海：上海古籍出版社、1999年、342頁。
- (140) 金孝維『有此廬詩鈔』前掲『清代閩秀集叢刊』第十五冊、317-362頁。